

# 徳島市埋蔵文化財発掘調査概要 2

1992. 3

徳島市教育委員会

# 徳島市埋蔵文化財発掘調査概要 2

1992. 3

徳島市教育委員会

## 序 文

「水と緑」に象徴される徳島市におきましても、近年、諸開発の波が押し寄せています。徳島市では、開発事業の増加に伴う埋蔵文化財の発掘調査も精力的に実施されており、徳島の歴史が少しずつではありますが、解明されようとしています。

このような状況におきまして、1989年には、発掘調査の成果をとりまとめました『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要1』が刊行され、このたび、第2集目が発刊される運びになりました。

本書刊行につきましては、埋蔵文化財に対する理解を深めていただきますと共に、文化財の保護・保存・活用の一助になれば幸甚かと存じます。

なお、最後になりましたが、発掘調査にあたり、関係各位に多大な御配慮をいただきましたことに深く感謝申し上げます。

1992年3月31日

徳島市教育委員会

教育長 小林 實

## 例　　言

1. 本書は、昭和63年～平成3年度に徳島市内の埋蔵文化財包蔵地における諸開発事業に伴い実施した、3遺跡4件の発掘調査についての概要報告書である。
2. 報告の対象となった遺跡名・調査原因・調査場所・調査期間・調査面積は、本文に記した。
3. 本書の作成は、各調査担当者（一山典、勝浦康守、三宅良明）が執筆し、目次欄に担当名を記した。なお、編集は、勝浦が行った。
4. 発掘調査は、徳島市教育委員会が主体となり、本書に係る経費は徳島市教育委員会が負担した。
5. 出土遺物・図面・写真等の整理、報告書作成に係る作業は各担当者が行った。また、資料の整理には、多数の調査員ならびに調査補助員の支援を得た。
6. 発掘調査に伴う日誌、写真、図面、台帳、出土遺物は、徳島市教育委員会が保管する。
7. 発掘調査を実施するにあたり、開発申請者をはじめ、多数の関係者諸氏に多大な配慮をいただいた。記して感謝の意を表する。



徳島市遺跡分布図（国土地理院発行 5万分の1 図幅「徳島」「川島」使用）

# 目 次

## 序 文

## 例 言

## 本文 目 次

I.	名東遺跡発掘調査概要	
—老保健施設建設工事に伴う発掘調査—	(勝浦)	1
II.	中島田遺跡発掘調査概要	
—マンション建設工事に伴う発掘調査—	(勝浦)	19
III.	樋口遺跡発掘調査概要	
—上八万コミュニティーセンター建設工事に伴う発掘調査—	(一山)	25
IV.	名東遺跡発掘調査概要	
—宅地造成工事に伴う発掘調査—	(三宅)	43

## 挿図図版

### I. 名東遺跡発掘調査概要

- 第1図 調査地位置図  
第2図 調査地概略図  
第3図 遺構配置図  
第4図 土器棺SI01  
第5図 方形周溝墓SL03(2~4), SL04(1)  
土器棺SI01(5,6)出土遺物  
第6図 井戸SE01  
第7図 Pit01(7,8), Pit02(9), Pit03(10)  
Pit04(11), 溝SD01(12~18), 井戸  
SE01(19~27), 土壙SK01(28),  
SK02(29~31)出土遺物  
第8図 溝SD02(32・33), SD03(34~48)

出土遺物

- 第9図 据立柱建物変遷推移図  
第1表 方形周溝墓一覧  
第2表 据立柱建物規模一覧

### II. 中島田遺跡発掘調査概要

- 第1図 調査地位置図  
第2図 調査地概略図  
第3図 遺構配置図  
第4図 土壙SK01(1~10)出土遺物

### III. 樋口遺跡発掘調査概要

- 第1図 樋口遺跡周辺集落遺跡分布図  
第2図 調査地概略図及びグリッド配置図  
第3図 検出遺構配置図  
第4図 据立柱建物SB01実測図  
第5図 土壙SK06実測図

第6図 出出土器実測図

第7図 出土管状土錘実測図

第8図 出土鉄製品・石器実測図

### IV. 名東遺跡発掘調査概要

- 第1図 調査地位置図  
第2図 遺構配置図  
第3図 積穴住居跡SA01出土遺物  
第4図 柱穴SPII02および出土遺物  
第5図 木棺墓SJ01, 02  
第6図 出土遺物(1)  
第7図 出土遺物(2)  
第8図 出土遺物(3)

## 写真図版

### I. 名東遺跡発掘調査概要

- 図版1 調査地全景  
図版2 上：方形周溝墓SL03, 04  
下：方形周溝墓SL04  
図版3 上：方形周溝墓SL03東側溝  
下：方形周溝墓SL03東側溝土器  
検出状況  
図版4 上：方形周溝墓SL05  
下：方形周溝墓SL05主体部  
図版5 上：土器棺SI01  
下：溝SD02, SD03  
図版6 上：井戸SE01掘形断ち割り  
下：井戸SE01断ち割り  
図版7 方形周溝墓SL03(2~4), 土器棺S  
I01(6)出土遺物

図版 8 Pit04(11), 井戸SE01(23,25,27,31), 溝SD02(33), SD03(35,36,42,45,46,48)出土遺物

## II. 中島田遺跡発掘調査概要

図版 1 上: 調査地 I 区全景  
下: 調査地 II 区全景

図版 2 土壌SK01(1~12), 自然河道(11~12)出土遺物

## III. 樋口遺跡発掘調査概要

図版 1 上: 調査区東半部検出遺構  
下: 調査区東半部検出遺構遺物出土状況

図版 2 左 1 段目: 調査区西半部検出遺構  
左 2 段目: 調査区西半部検出遺構  
左 3 段目: 溝SD03,02,05

左 4 段目: 溝SD03, 土壌SK01,02  
右上: 溝SD01  
右中: 溝SD02北端部遺物出土状況

右下: 溝SD07須恵器出土状況

図版 3 上: 土壌SK05遺物出土状況  
下: 土壌SK06遺物出土状況

図版 4 上: 土器溜まりSR01遺物出土状況

左上: 土器溜まりSR01土師器出土状況  
左下: ピット土師器出土状況  
右上: 土器溜まりSR01土師器出土状況

右下: 圭頭形鉄鎌出土状況

図版 5 出土土器

図版 6 出土管状土錐

図版 7 上: 出土鉄製品  
下: 出土石棒

## IV. 名東遺跡発掘調査概要

図版 1 上: 積穴住居跡SA01遺物出土状況  
下: 積穴住居跡SA01

図版 2 上: SA01内甕出土状況  
下: SA01内鉢出土状況

図版 3 上: 積穴住居跡SA02a,02b,03,04  
下: SA02b内サヌカイト剥片出土状況

図版 4 上: 柱穴P II02内壺口縁部出土状況  
下: 積穴住居跡SA05

図版 5 上: SA05内石鏃出土状況  
下: 土壌SK02遺物出土状況

図版 6 上: 土器溜まりSR01検出状況  
下: 同下層部遺物出土状況

図版 7 上: 木棺墓SJ01,02  
下: 自然河道SD01

図版 8 出土遺物

図版 9 出土遺物

図版10 出土遺物

図版11 出土遺物

図版12 出土遺物

# I. 名東遺跡発掘調査概要

—老保健施設建設工事に伴う発掘調査—

調査場所：徳島市名東町1丁目104

調査期間：昭和63年10月17日～平成元年2月28日

調査面積：約1,700m<sup>2</sup>

## 1. 調査に至る経緯と経過（第1・2図）

名東遺跡は縄文時代晚期から江戸時代に至る県内屈指の集落遺跡として周知されている。今回の調査は、保健医療施設の建設工事に伴うものであり、事前の試掘調査により、遺跡の存在を確認し、開発原因者との協議の結果、本調査の実施に至った。

建設工事設計に従い、調査地を設定し、現代水田耕土層下約30cmの黄色シルト層上面において、遺構・遺物の検出に努めた。



第1図 調査地位置図



第2図 調査地概略図

なお、調査成果の一部は、第10回埋蔵文化財資料展「阿波を掘る」において、出土遺物の公開展示を行っている。

## 2. 調査概要（第3～8図・図版1～8）

今回の調査では、弥生時代の方形周溝墓群、南北朝・室町時代の掘立柱建物、溝、土壙墓を検出している。以下、主な遺構・遺物について概略する。

### ① 方形周溝墓SL01～07

方形周溝墓は、四隅が途切れる溝で長方形に区画を行うものであり、従来の調査例より名東遺跡では典型的な形態とされる。また、SL03・07のように、2本の溝で区画を



第3図 遺構配置図

意識させようとするものも見られる。このような形態の遺構が方形周溝墓の範疇におさまるものかという疑問は残るが、SL03東側溝の土器の供獻はその可能性を示唆しているのではなかろうか。

また、SL06の周溝は、溝底部が隅部において急激に立ち上がるものの、完全に途切れるものではなく、従来より認識されてきた形態に疑問が持たれる。盛土および主体部は、後世の削平のため、そのほとんどは残存しないが、SL06は壁面観察において最大30cmの盛土を確認、また、SL05では、区画中央部で、長辺1.9m、短辺0.9m、深さ0.2mを測る主体部（木棺墓）を確認している。

SL05では、周溝底部より浮いた状態で土器の供獻がみられ、周辺部でも、土壙墓、土器棺が確認され、SL05における多次、周辺埋葬が考えられる。

SL03東側溝底部より壺（2・3）、把手付台付鉢（4）、SL04北側周溝より壺（1）が出土している。

## ② 土器棺SI01

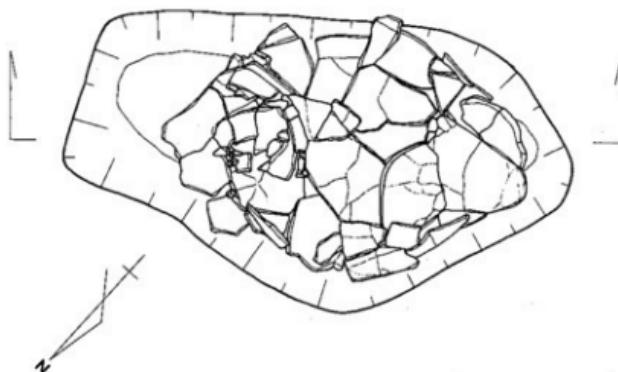
遺構検出時に、甕の全形があらわれたため掘形については不明である。

甕(6)を横位にし、甕(5)を用いて閉口させる。閉口に際しては、甕(5・6)の口縁端部の「く」の字状の屈曲を利用し、掛け合わせている。

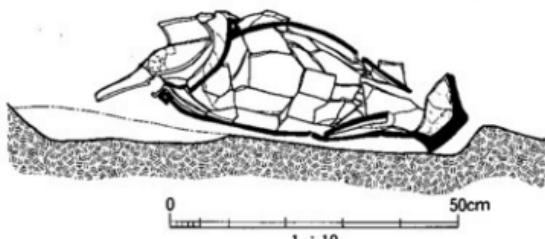
甕(5)は、全形の1/3しか残らず破損状況から、閉口用の蓋として打ち割られたものと考えられる。

周 囲 露 基 (SL)	検出状況	形 態	規 模 長辺×短辺 (m)	土 器			備 考
				壺	甕	その他	
01	北 溝						中世溝に 被覆
02	全 周 溝	長方形	11.5×6.5	○			四隅途切 れる
03	東・西溝	長方形	9.0×5.5	○			把手付 台付鉢 第2条の 区画
04	全 周 溝	長方形	9.0×5.5	○	○		四隅途切 れる
05	北・東・西溝	長方形	8.0×6.0	○			木棺直葬 1基
06	北・東溝						堅土確認
07	北・南溝	長方形					第2条の 区画

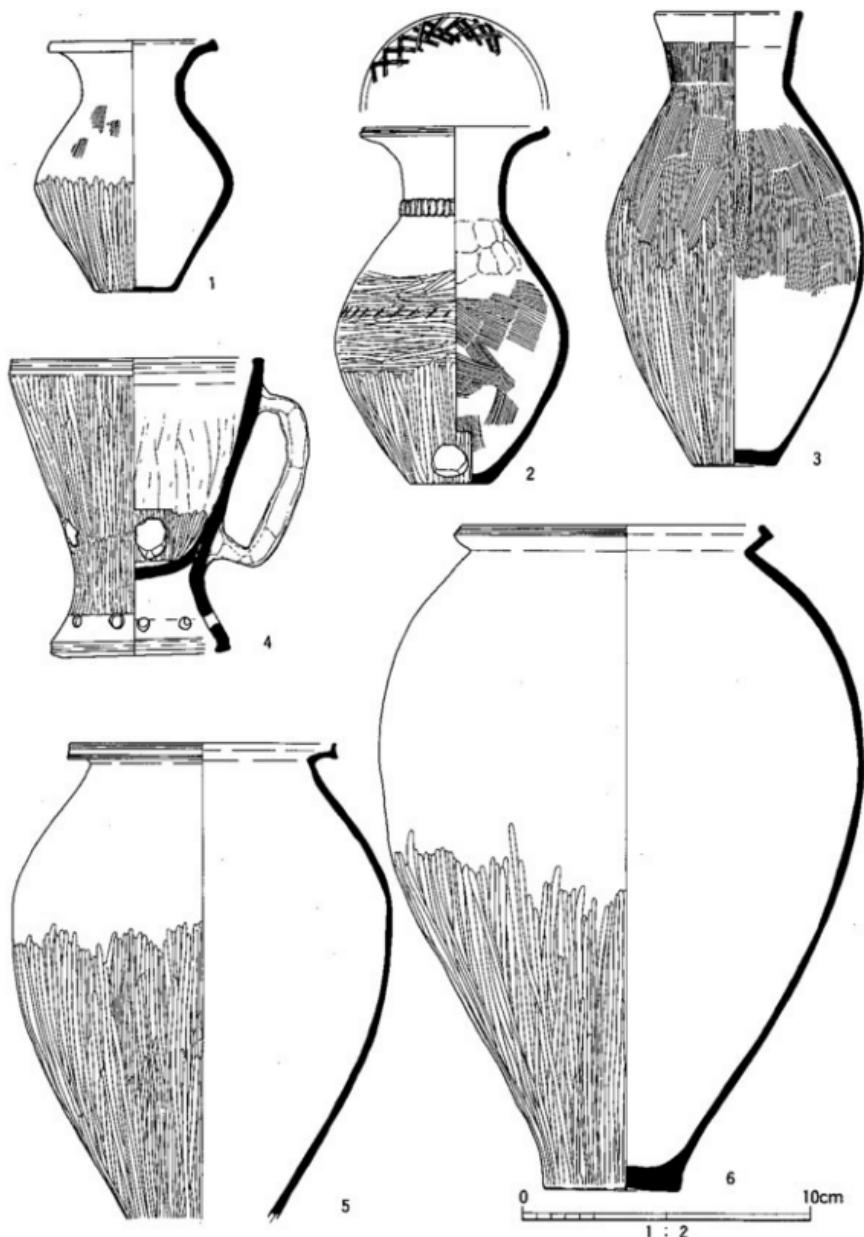
第1表 方形周溝墓一覧  
(『名東遺跡発掘調査概要』, 1990.3改変)



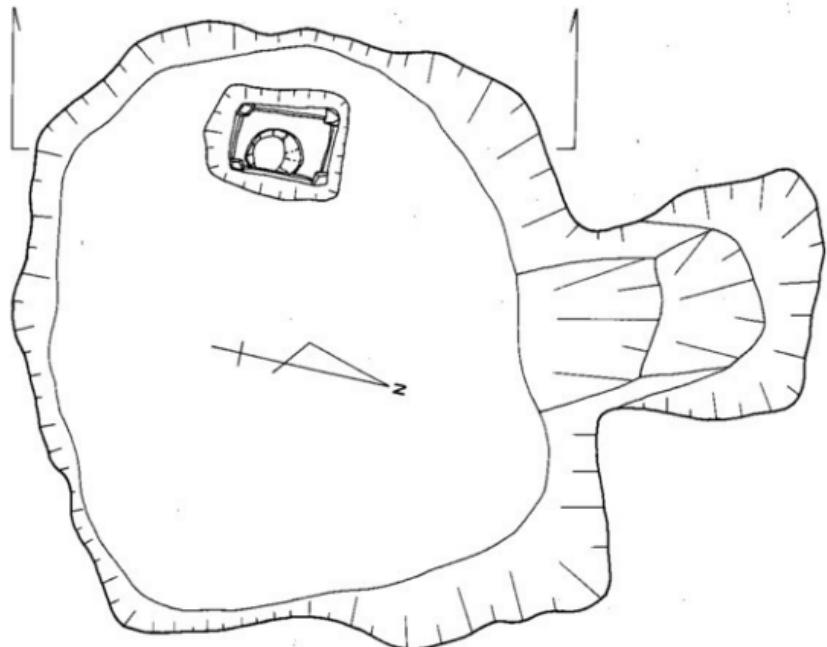
T.P. +6.4m



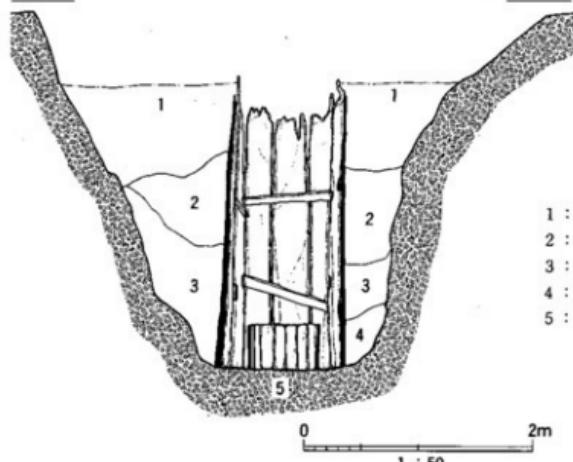
第4図 土器棺SI01



第5図 方形周溝墓SL03(2~4), SL04(1), 土器館SI01(5・6)出土建物



T.P. +6.2m



- 1 : 黄色～黄褐色シルト層
- 2 : 青灰色粘土層
- 3 : 青灰色シルト質粘土層
- 4 : 青灰色極細砂～シルト層
- 5 : 黄色シルト層

第6図 井戸SE01

### ③ 堀立柱建物SB01~09

堀立柱建物はすべて東西棟である。柱穴出土遺物による時期判別は困難であるが、時間的継続性をもって経営されたと考えられる。建物SB08-Pit01より備前摺鉢(9)、建物SB06-Pit03より土師器鍋(10)が出土している。また、柱として纏めえなかったが、Pit02より吉備系土師器椀(7・8)、Pit04より土師器鍋(11)が出土している。

建物 SB	間 数 梁行×桁行	梁行×桁行 (m)	備 考
01	2 × 3	4.2 × 6.2	側柱建物
02	2 × 4	3.6 × 7.2	側柱建物
03	2 × 3	4.2 × 7.2	側柱建物
04	2 × 3	5.2 × 7.2	南・西廂付
05	3 ×	6.5 ×	
06	2 ×	4.8 ×	
07	2 × 2	4.8 × 4.8	総柱建物
08	2 × 4	4.4 × 10.5	西廂付
09	3 × 5	7.2 × 10.0	側柱建物

第2表 堀立柱建物規模一覧

### ④ 井戸SE01

掘形の平面形は、一辺2.5mの隅丸方形を呈し、その一部に張り出し部を持つ。掘形の西端部に一辺1mの方形の井筒を持ち、深さは3mを測る。井戸枠の形態は、方形隅柱横桟留である。張り出し部は、井戸構築時に何らかの機能を果たしていたものだろうか。掘形埋土は2層に大別できる。下層(2~4)は青灰色粘土であり、上層(1)は黄色シルトである。考えられることは、井戸枠の設置・固定に、下位から中位にかけて粘土が持ち込まれ、上位には掘形掘削時の排出土が再利用されていることである。

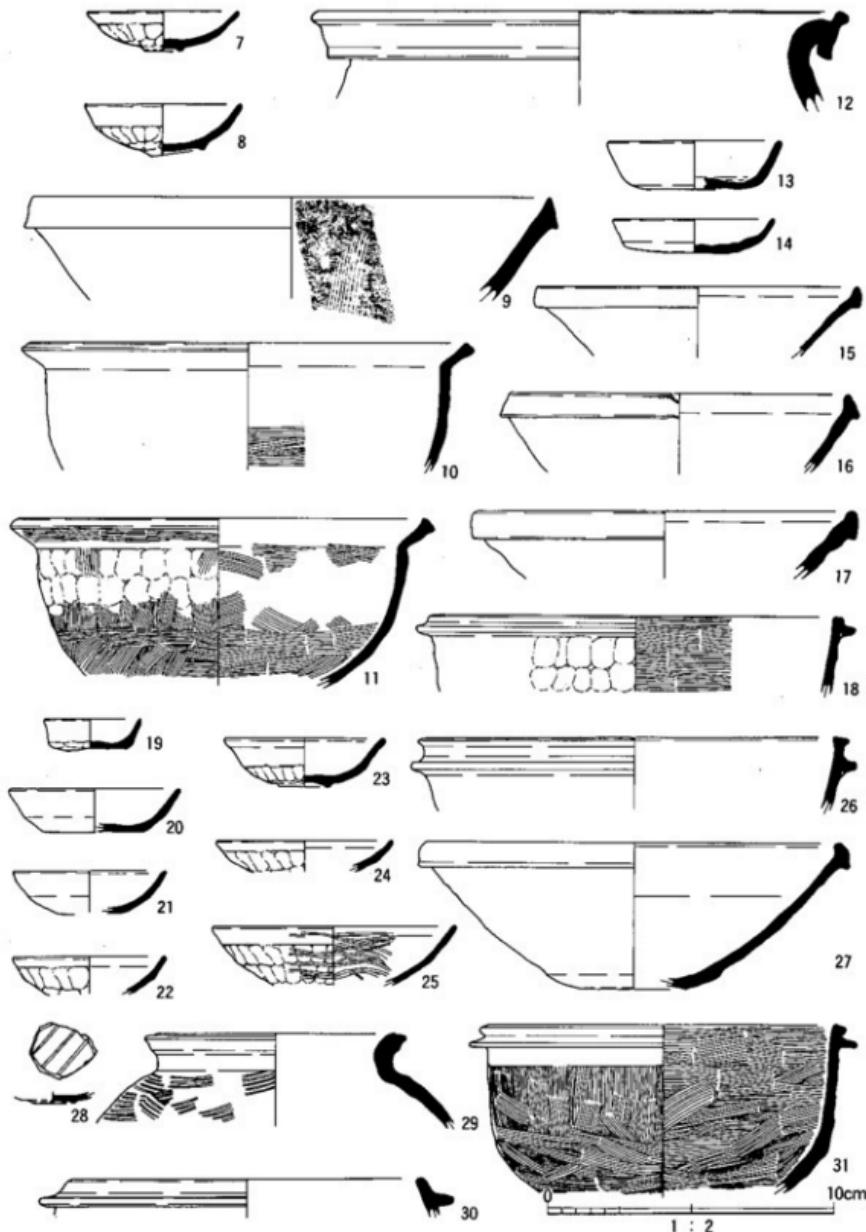
掘形より吉備系土師器椀(23)、和泉型瓦器椀(24)、土師器坏(21)、また、井筒より土師器坏(19・20)、吉備系土師器椀(22)、和泉型瓦器椀(25)、土師器釜(26)、東播系捏鉢(27)が出土している。

### ⑤ 溝SD01

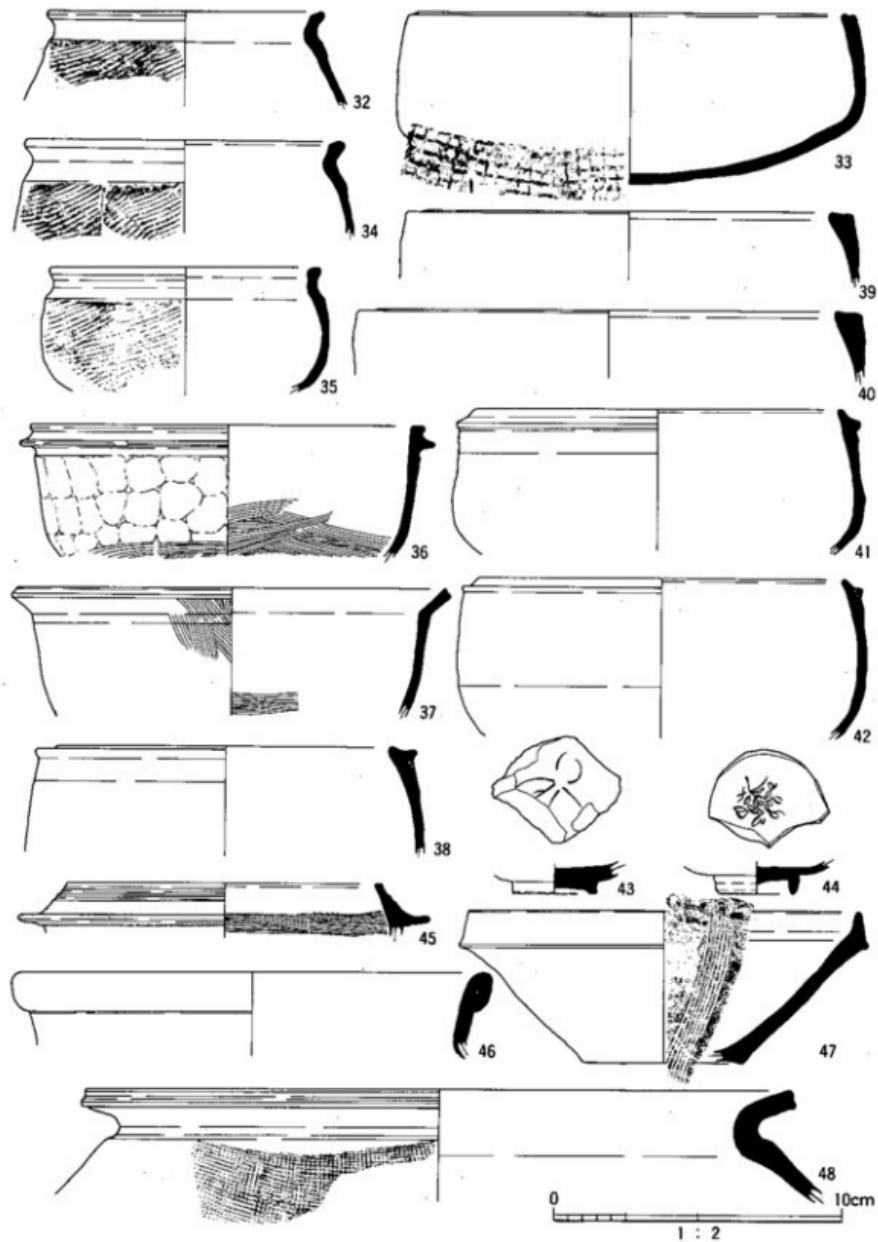
幅1.5~3m、深さ0.1~0.2m、断面形がレンズ状を呈し、建物群を区画する溝である。土師器坏(13・14)、土師器捏鉢(15)、東播系捏鉢(16・17)、土師器釜(18)、常滑産甕(12)が出土している。

### ⑥ 溝SD02・03

調査地南部で検出された東西方向に並行する溝である。SD02は幅2.8m、深さ0.4m、SD03は幅3.0m、深さ0.4mを測り、共に断面形は深い皿状を呈する。断面土層観察より同時存在が考えられる。SD02より土師器鍋(32・33)、SD03より土師器鍋(34・35・37)、土師器釜(36・38~42)、和泉産瓦質釜(45)、青磁碗(43・44)、備前產壺(46)、備前產摺鉢(47)、亀山產甕(48)が出土している。



第7図 Pit01(7.8), Pit02(9), Pit03(10), Pit04(11), 満SD01(12~18),  
井戸SE01(19~27), 土壌SK01(28), SK02(29~31)出土遺物

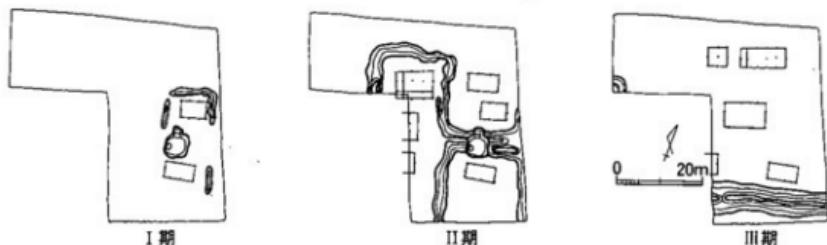


第8図 溝SD02(32・33), SD03(34~48)出土遺物

### 3. 小 結

今回の調査では、弥生時代の方形周溝墓群ならびに中世集落の一角を検出している。弥生時代の方形周溝墓群が検出されているのは、名東遺跡では2例目であり、周溝墓の形態・規模は類似する。しかし、方形周溝墓はいずれも、後世の削平を受けている状況での検出であり、（造営の形態≠検出時の形態）である。出土遺物は、Ⅲ様式古～新段階の様相を示し、これら周溝墓群に対応すべき集落の分布確認が今後の焦点である。

中世の掘立柱建物は9棟確認しているが、同時存在とは考え難く、時期差が考えられる。今回の調査では、時期設定を行えるだけの遺物の出土に恵まれていないが、建物の方向性ならびに周辺遺構との関係、遺構間の切り合いによる新旧関係を考慮し集落構造の変化を推定してみることにする。



第9図 掘立柱建物変遷推移図

I期：建物SB01・02が小溝になり区画され、井戸SE01が機能する時期。

II期：建物SB01～06が溝SD01により区画され、井戸SE01が継続使用される時期。

III期：溝SD01による区画から、大溝SD02・03により区画され、井戸SE02が機能する時期。

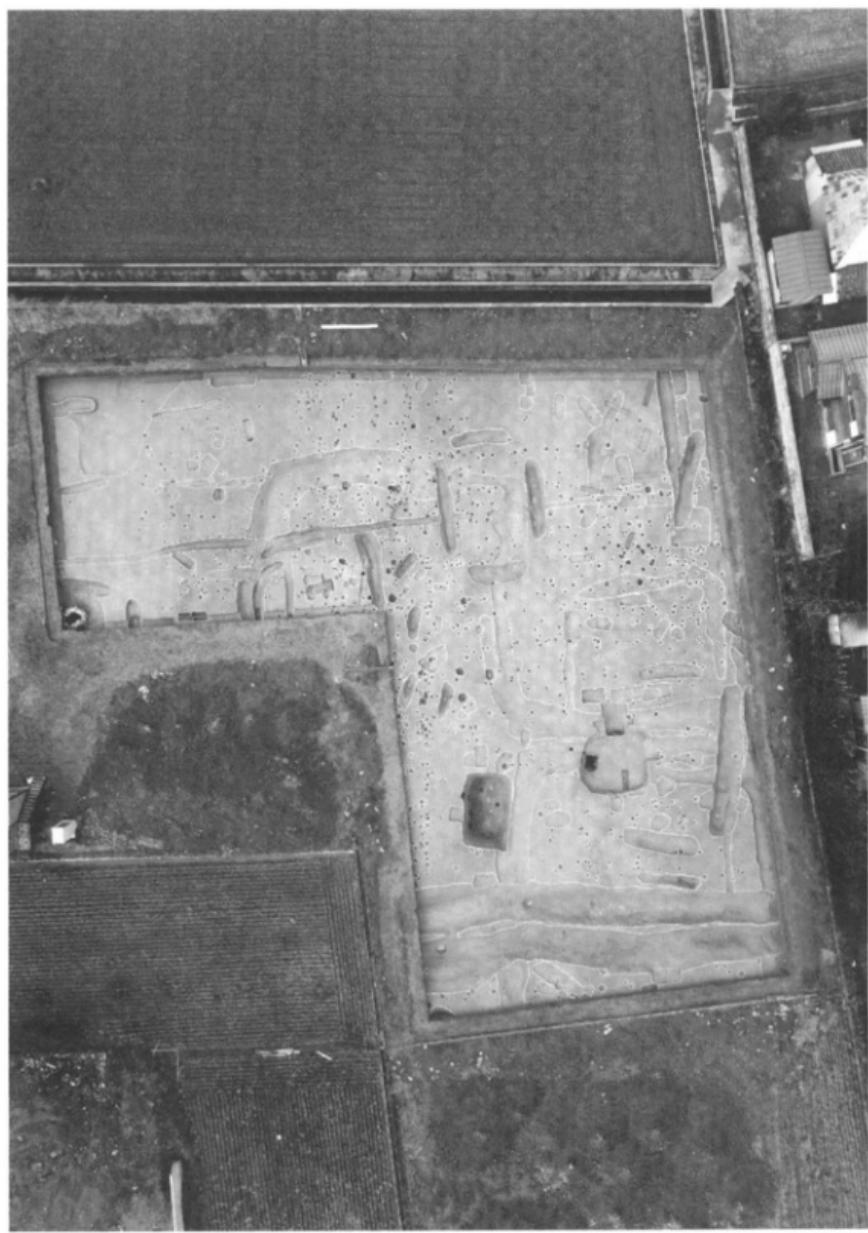
建物が大地割（坪境？）により区画される時期。

これらI～III期に分けられると考えられ、また、周辺遺構の出土遺物を考慮して、各期の略年代として、I期：14世紀前半～中葉、II期：14世紀中葉～後半、III期：15世紀を考えたい。

出土遺物には、吉備系土師器椀・和泉型瓦器椀・備前・常滑・龜山・東播系捏鉢・和泉産釜などの搬入土器が主体を占め、中島田遺跡に見られる様相が名東遺跡においても見られる。土器（物）が自由に動く中世的な現象であり、当時の流通を考える上で興味深い。

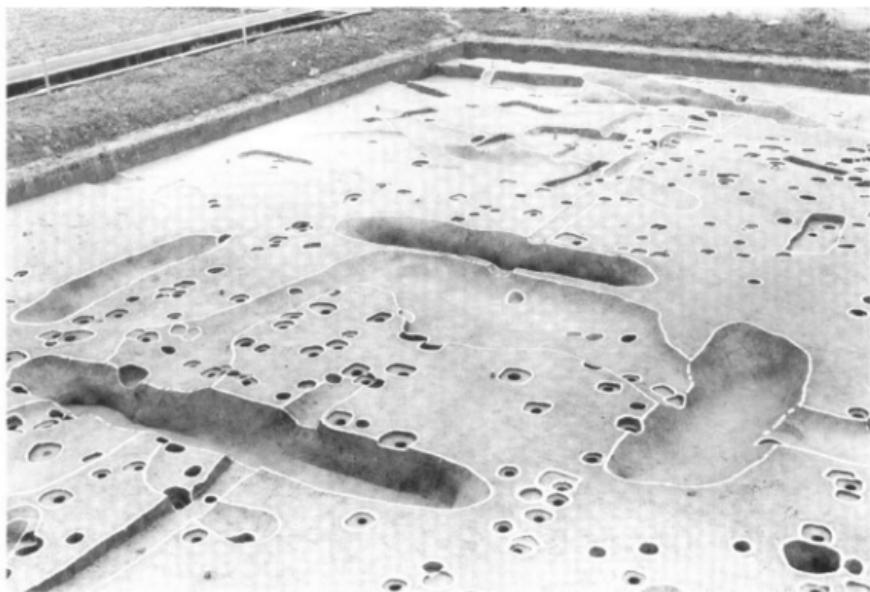
今後、中世遺跡の調査研究を通じて、阿波の中世社会がより明確に復原されることが望まれる。





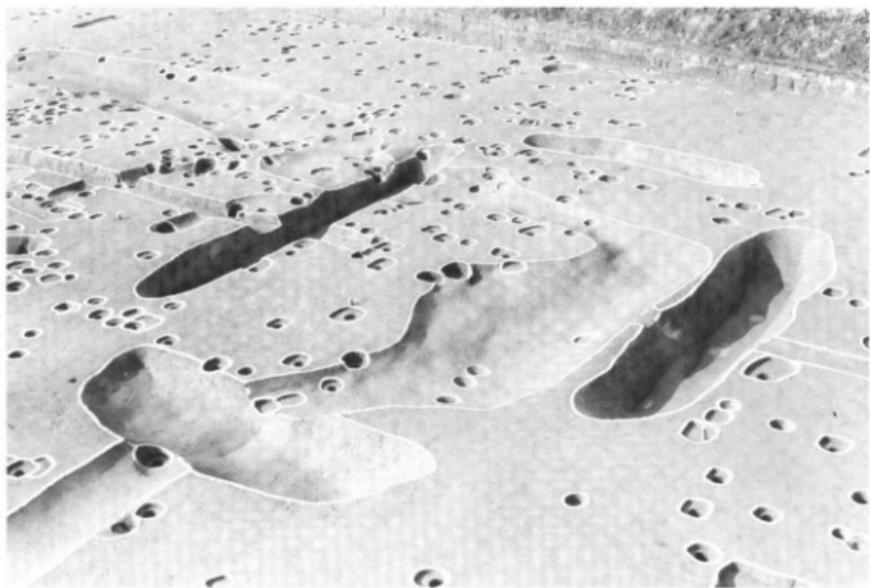
調査地全景

航空写真



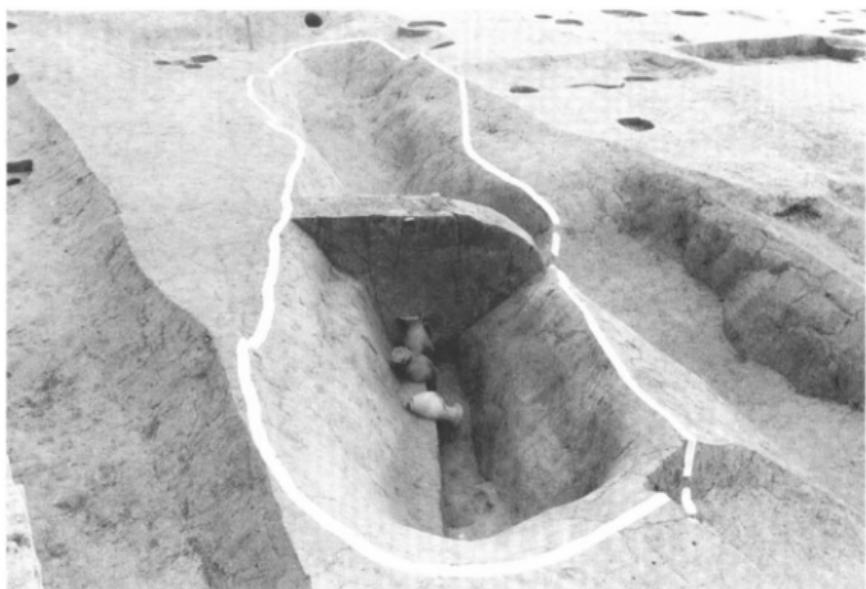
方形周溝墓SL03, 04

南西より



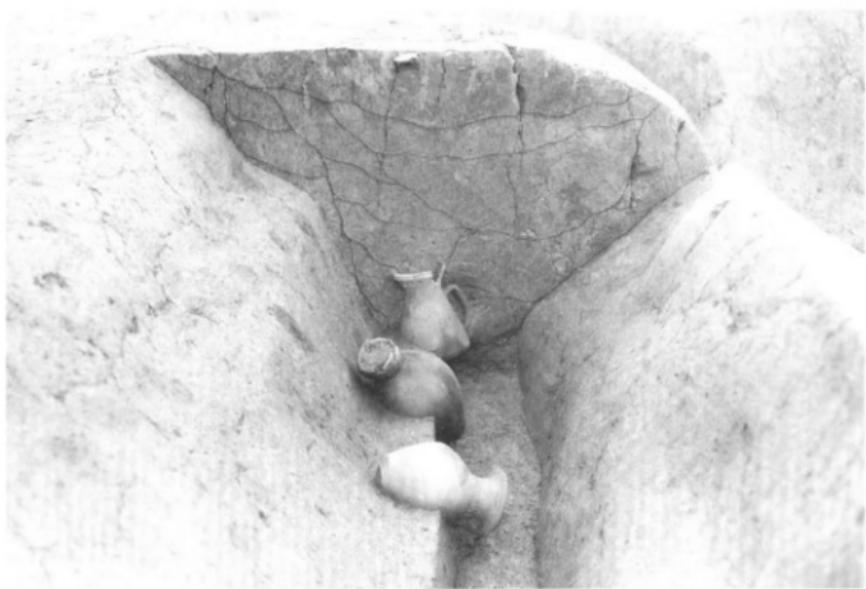
方形周溝墓SL04

南東より



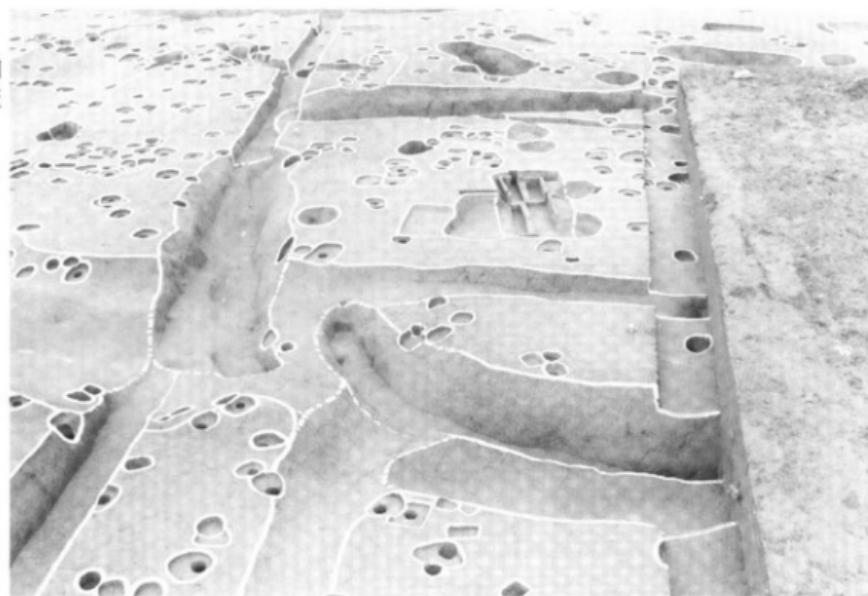
方形周溝墓SL03東側溝

北より



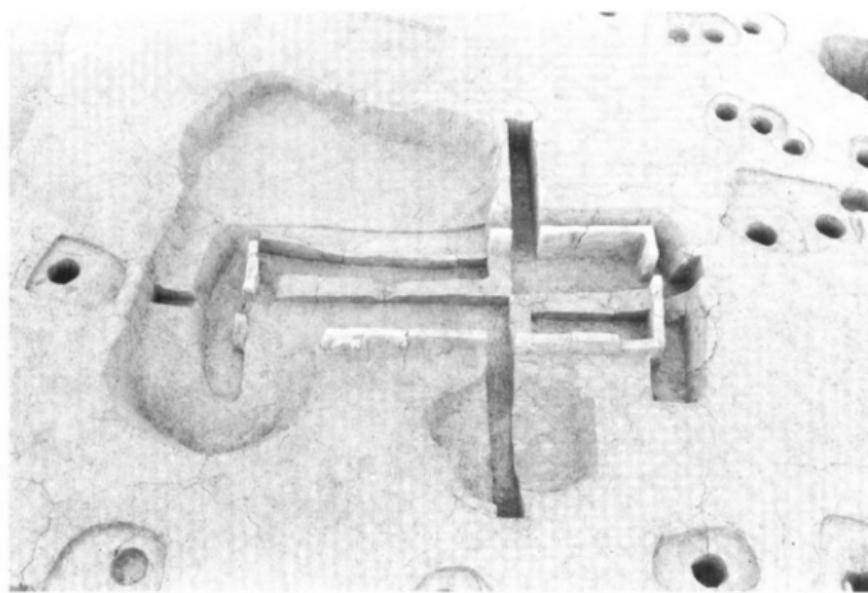
方形周溝墓SL03東側溝土器検出状況

北より



方形周溝墓SL05

西より



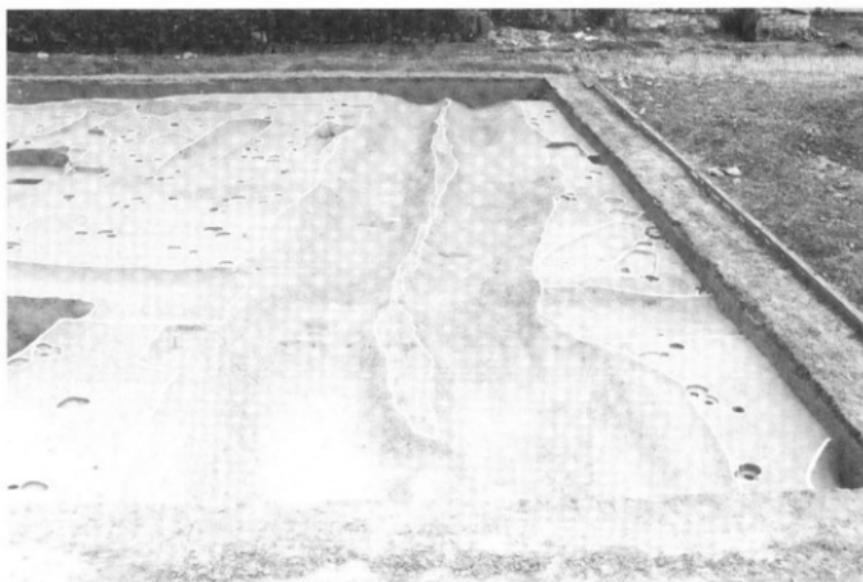
方形周溝墓SL05主体部

南より



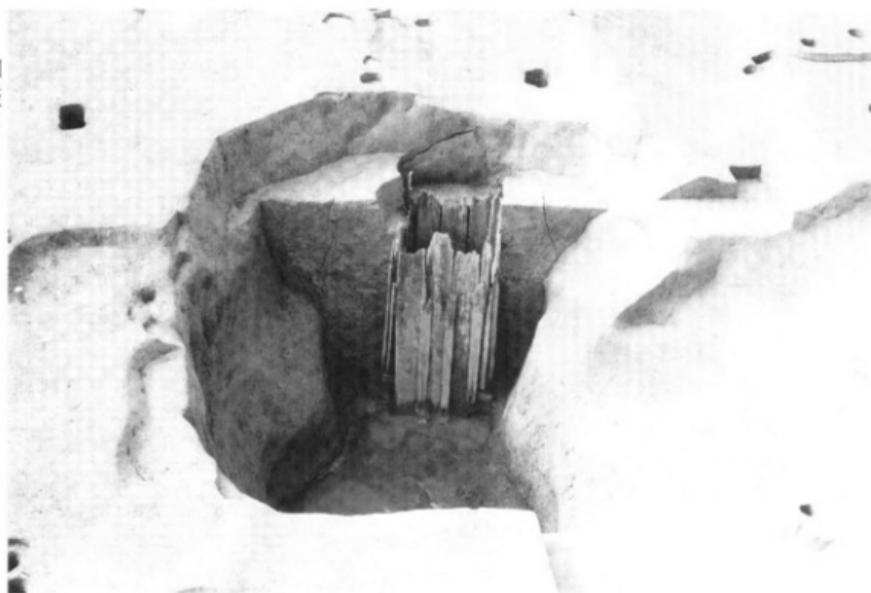
土器棺SI01

南西より



溝SD02, SD03

西より



井戸SE01掘形断ち割り

東より



井戸SE01断ち割り

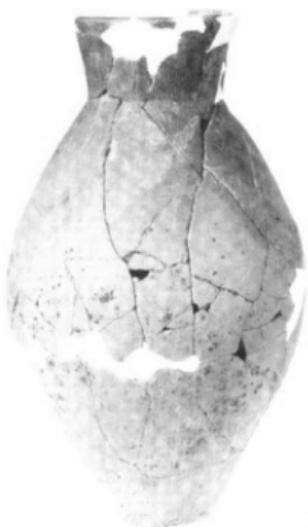
東より



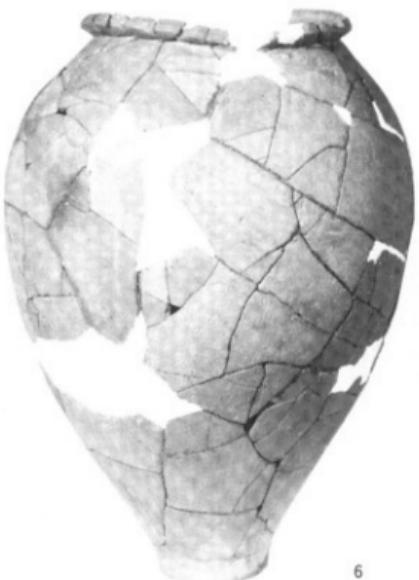
2



4

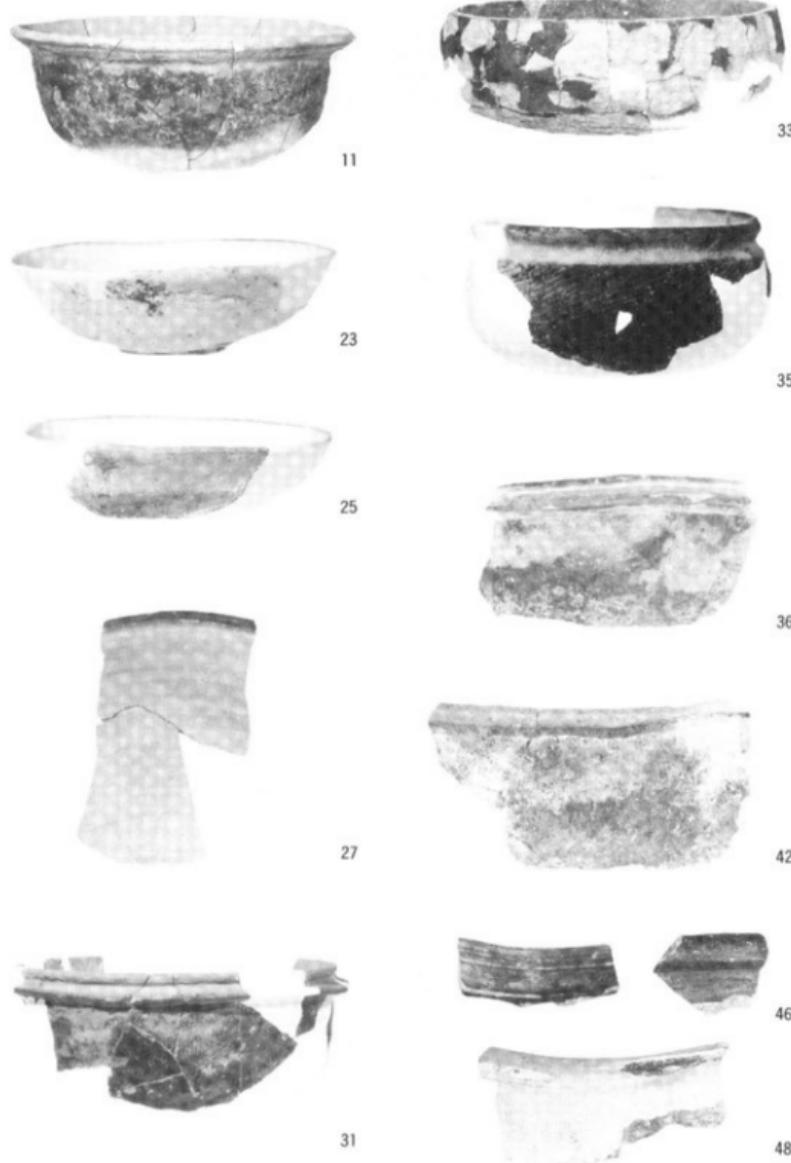


3



6

方形周溝墓SL03(2~4), 土器棺SI01(6)出土遺物



Pit04(11), 井戸SE01(23, 25, 27, 31), 溝SD02(33), SD03(35, 36, 42, 45, 46, 48)出土遺物

## II. 中島田遺跡発掘調査概要

—マンション建設工事に伴う発掘調査—

調査場所：徳島市中島田町2丁目12-1, 10-2

調査期間：平成元年4月1日～平成元年5月10日

調査面積：約400m<sup>2</sup>

### 1. 調査に至る経緯と経過（第1・2図）

中島田遺跡は船喰川水系の旧河川が形成した標高T.P.+2mを測る低位沖積地に位置する中世集落遺跡である。遺跡の認識は比較的新しく、1986年、県道徳島鴨島線道路改良工事に伴う徳島県教育委員会の発掘調査によりその存在が明確化された。

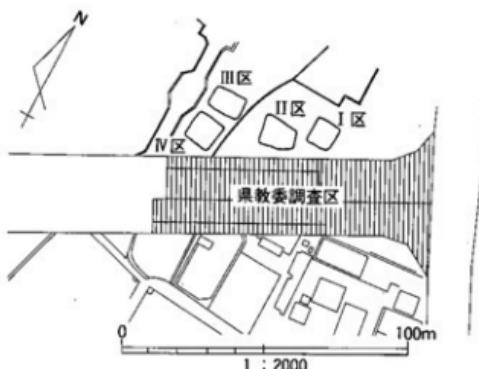
今回の工事対象区域は、県教委が実施した調査地に北接し遺跡の拡がりが明確な地域であることから、開発原因者との協議の結果、発掘調査の実施に至った。

マンション建設設計に従い、調査対象地（I～IV区）を設定し、現代盛土層下約0.9mの黄色シルト層上面において、遺構・遺物の検出に務めた。

なお、調査成果の一部は、第10回埋蔵文化財資料展「阿波を掘る」において、出土遺物の公開展示を行っている。

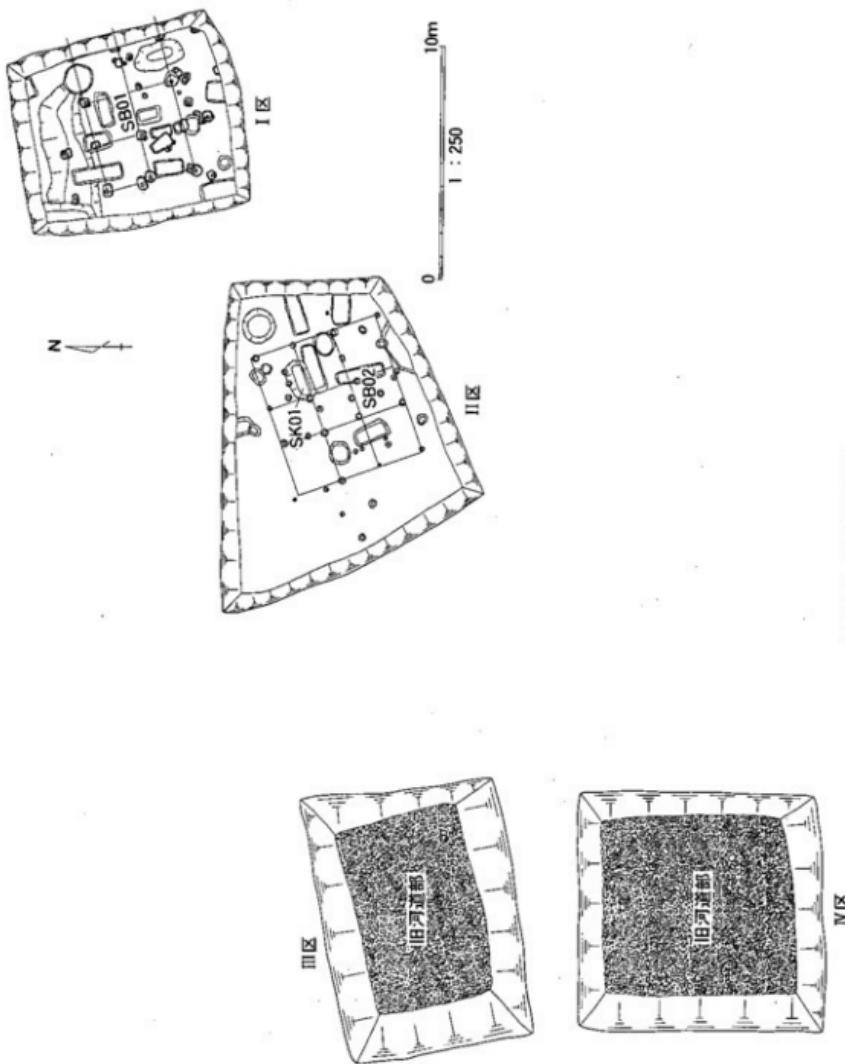


第1図 調査地位置図



第2図 調査地概略図<sup>(1)</sup>

第3図 遺構配置図



## 2. 調査概要（第3・4図、図版1・2）

今回の調査では、掘立柱建物、土壙、溝、自然河道を検出しており、県教委の発掘調査成果に対応する遺構・遺物を検出している。以下、主な遺構・遺物について概略する。

### ① 掘立柱建物SB01

調査地内において、桁行3間×梁行2間を検出している東西棟建物であり、桁行1間分が調査地外へ広がる可能性が考えられる。建物内の柱が一部存在しない。建物内空間の使用目的によるものであろうか。柱間寸法は、桁・梁行ともに2m等間である。柱穴掘形の平面形は、径0.4~0.5mを測る方形もしくは長方形を呈し、深さ0.5~0.6mを測る。柱穴底部には根石が配され、非常に規格性の高い建物である。

### ② 掘立柱建物SB02

桁行3間×梁行3間の東西棟建物である。柱間寸法は、南側桁行が西から2.1~1.7~2.1m、東側梁行が北から1.8~1.8~2.1mである。柱穴掘形の平面形は、円形を呈し、径0.4m、深さは0.3mを測る。柱間寸法・柱配置において、SB01に比較して規格性に欠ける。

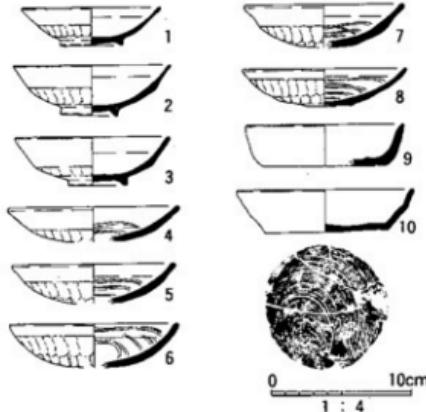
### ③ 土壙SK01

平面形が長方形を呈し、長辺1.8m×短辺1m、深さ0.5mを測る。壁面が垂直であり、底部が平坦であることから土壙墓の可能性が考えられる。

出土遺物には、土師器椀(1~3)、瓦器椀(4~8)、土師器杯(9・10)がある。(1~3)は、「吉備系土師器椀」であり、(4~8)は、「和泉型瓦器椀」である。瓦器椀(8)は、退化した高台を持つが、(4~7)は無高台である。いずれも、内面体部には数条の圈線状ミガキが施される。(4~6・7)は炭素吸着が施されず、胎土色調が赤褐色あるいは灰白色を呈する。土師器杯(9)は底部切り離しに回転ヘラ切り、(10)は回転糸切りが使用される。

### ④ 自然河道

県教委が調査区西部において検出している自然河道に連続するものである。今回の調査では、河道中央底部が検出され、



第4図 土壙SK01出土遺物

両岸の落ち込み部は確認していない。

出土遺物には、瓦質羽釜（和泉産）、擂鉢（備前産）がある。

### 3. 小 結

今回の調査では、14世紀後半頃に経営されていた集落の一角を確認しており、1986年に始まる県教委の発掘調査成果に補足すべき成果をあげている。

掘立柱建物SB01・02は、柱穴の出土遺物が皆無であり、時期判定に困難を期すが、県教委の発掘調査により検出されている一連の建物と方向を同じくすることから、時間的並行経営が考えられる。

出土遺物は微量であり、しかも、土器生産における在地的主体性が全く表れていない。供膳形態の椀には、吉備系土師器椀・和泉型瓦器椀が使用され、調理形態の鉢には備前産擂鉢、東播系捏鉢、煮沸形態の羽釜にまで和泉産の搬入が見られる。このような搬入土器主体の様相は、「中世のある時期」以降、中島田遺跡をはじめとする吉野川下流域の遺跡では普遍的様相として捉えられる。

これには、中世以降における窯業生産品の商品化および、畿内・瀬戸内海沿岸における商業交易活動の活発化が大きな役割を果たしているのではあろうが、これら商業化の繁栄現象を受け入れることが可能であった中世阿波の歴史的背景を考えるべき必要がある。

#### (註)

- (1) 徳島県教育委員会『中島田・南島田遺跡発掘調査報告書』(1990年)の掲載図版に一部補足したものである。
- (2) 従来「早島式」と称されてきたものである。
- (3) 土師器杯における底部切り離し技法のヘラ切りから糸切りへの移行は、阿波國府跡第6次調査SK44出土資料より、13世紀初頭を前後する時期には行われていたと考えられる。ただし、中島田遺跡における状況は、ヘラ切りから糸切りへの完全移行を示していない。



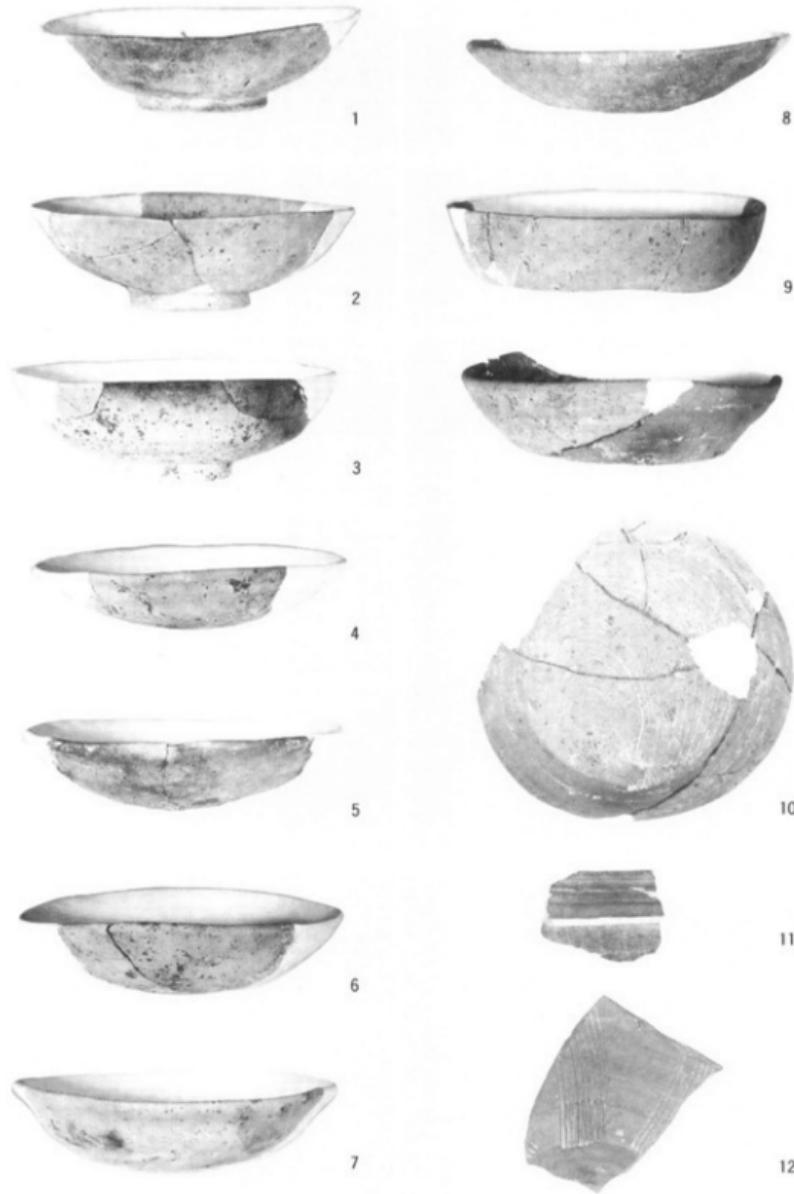
調査地Ⅰ区全景

南より



調査地Ⅱ区全景

西より



土壤SK01(1~10), 自然河道(11・12)出土遺物

### III. 樋口遺跡発掘調査概要

—上八万コミュニティセンター建設に伴う発掘調査—

調査場所 徳島市上八万町樋口61ほか

調査期間 平成2年6月11日～10月上旬

調査面積 約800m<sup>2</sup>

#### 1. 位置と歴史的環境及び調査に至る経過

樋口遺跡は、園瀬川南岸の自然堤防上に形成された海拔6m前後の微高地上に展開している。昭和58年度の上八万小学校体育馆の新築工事に伴う徳島市教育委員会の緊急調査などにより、弥生時代後期～近世に至るまでの遺構・遺物が検出され、朱の精製との関連が考えられる土器内面に朱の付着した土器片なども確認されている。

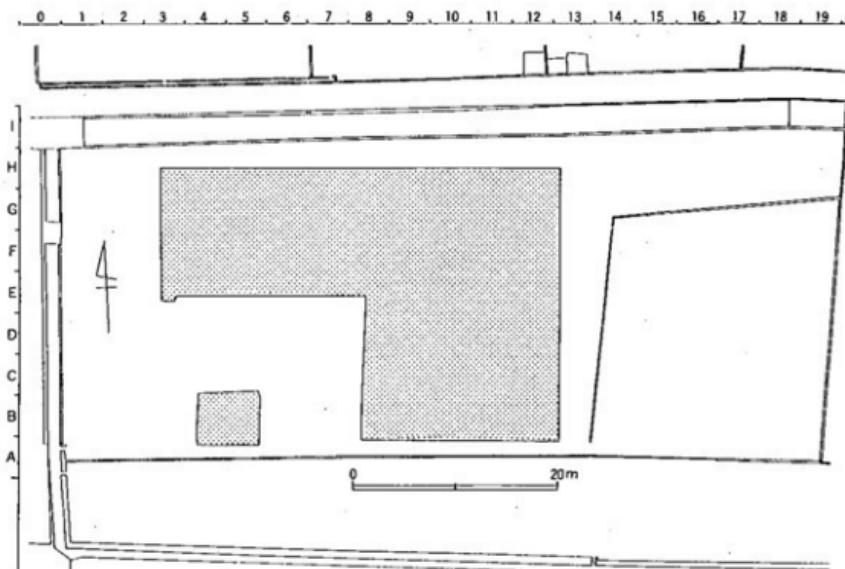
このように、樋口遺跡は弥生時代後期～近世にかけての複合遺跡であり、眉山南側の数少ない集落遺跡として注目される遺跡である。

調査は、4m×4mのグリッドを設定し、西より1～19、南よりA～H（K）とし、A1・A2グリッドなどと呼称した。



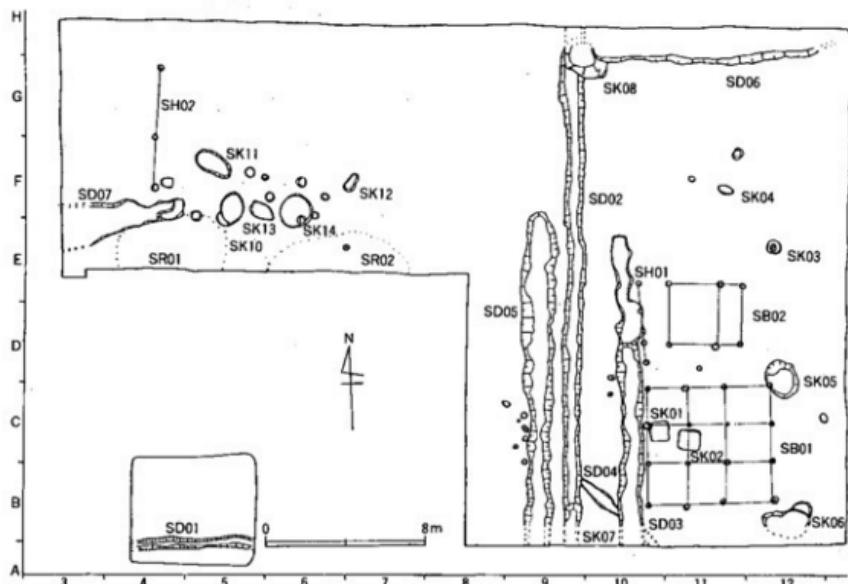
第1図 樋口遺跡周辺集落遺跡分布図

- |        |         |        |        |
|--------|---------|--------|--------|
| 1 樋口遺跡 | 2 三谷遺跡  | 3 庄遺跡  | 4 南庄遺跡 |
| 5 鮎喰遺跡 | 6 鮎喰南遺跡 | 7 名東遺跡 | 8 矢野遺跡 |



第2図 調査地概略及びグリッド配置図

■ 調査地点



第3図 検出遺構配置図

## 2. 検出遺構

今回の調査で検出された遺構は、掘立柱建物2・柱列2・溝7・土壙14などとともに、調査区の西半部南端に土器溜まりが2個所や、調査区全体に大小のピットなどが存在する。

### 掘立柱建物（SB01・SB02）

SB01は、調査区の南東部に検出され、現状では東西3間(6.8m)×南北3間(5.8m)の総柱建物で南側に統く可能性を有する。柱間心々距離は約1.8mである。柱穴より土師器などが出土している。

SB02は、SB01の北側約2mで検出された1間×1間の南北棟で、柱間心々距離は東西約2.7m、南北約3mを測り、東側に庇がつくものと思われる。柱穴から土師器・青磁などが出土している。

### 柱列（SH01・SH02）

SH01は、SB02に隣接して検出され、壠的要素を有し、土師器などが出土している。

SH02も、調査区の西端部で検出され、壠的要素を有するものと思われる。

### 溝（SD01～SD07）

SD01は、辻堂建設予定地区で検出された東西溝で、幅約40～60cm、深さ約10cmで約6m分確認されている。土師器・須恵器などが出土している。

SD02は、調査区の中央やや東よりに検出された南北溝で、幅約80～90cm、深さ約20～30cmで、約25m分確認され、調査区を縦断している。土師器・須恵器・瓦器・土鍤などが出土地している。

SD03は、SD02の東側約2.2mで検出された南北溝で、幅約1～1.2m、深さ約15～20cmで約16m分確認されている。土師器・須恵器などが出土している。

SD04は、SD02・03に切断されて部分的に確認された東西溝で、幅約40～60cmで深さ約20cm前後となっている。土師器・須恵器などが出土している。

SD05は、SD02の西側約80cm前後に隣接して検出された南北溝で、幅約1～1.5m、深さ約30cm前後で約17m分確認されている。土師器・須恵器・瓦器・土鍤などが出土している。

SD06は、調査区の東半部北端に検出された東西溝で、推定幅約1m前後、深さ約30cm前後で約13m分が確認され、SK08を切断している。土師器・須恵器などが出土している。

SD07は、調査区の西端部で検出された東西溝で、幅約1～2.2m、深さ約10cm前後で約6.5m分確認されている。土師器・須恵器などが出土している。

## 土 壤 (SK01～SK14)

SK01は約90cm×約100cmの方形プランを呈し、深さ約35cm前後を測る。土師器・須恵器・瓦器などが出土している。

SK02は、一辺約1.2mの方形プランを呈し、深さ約40cm前後を測る。土師器・須恵器・土鍤などが出土している。

SK03は、径約80cmの不整円形プランを呈し、深さ約10cm前後を測る。土師器・須恵器などが出土している。

SK04は、約80cm×約40cmの不整椭円形プランを呈し、深さ約10cm前後を測る。土師器・須恵器などが出土している。

SK05は、約1.9m×約1.5mの不整椭円形プランを呈し、深さ約25cm前後を測る。土師器・土鍤などが出土している。

SK06は、調査区の南東端に検出されたもので、約2.4m×約1.2mの不整椭円形プランを呈し、深さ約25cm前後を測る。土師器などが出土している。

SK07は、SD02を切る形で部分的に検出されたもので、深さ約30cm前後を測る。土師器・須恵器・瓦器などが出土している。

SK08は、SD02を切る形で検出された不整椭円形プランを呈するもので、深さ約70cm前後を測る。土師器・須恵器・瓦器などが出土している。

SK09は、約1.65m×約1.2mの不整椭円形プランを呈するもので、深さ約30cmを測る。土師器・須恵器・瓦器などが出土している。

SK10は、SK09に切られており、部分的に検出されたものである。

SK11は、約2m×約1mの不整椭円形プランを呈し、深さ約20cm前後を測る。

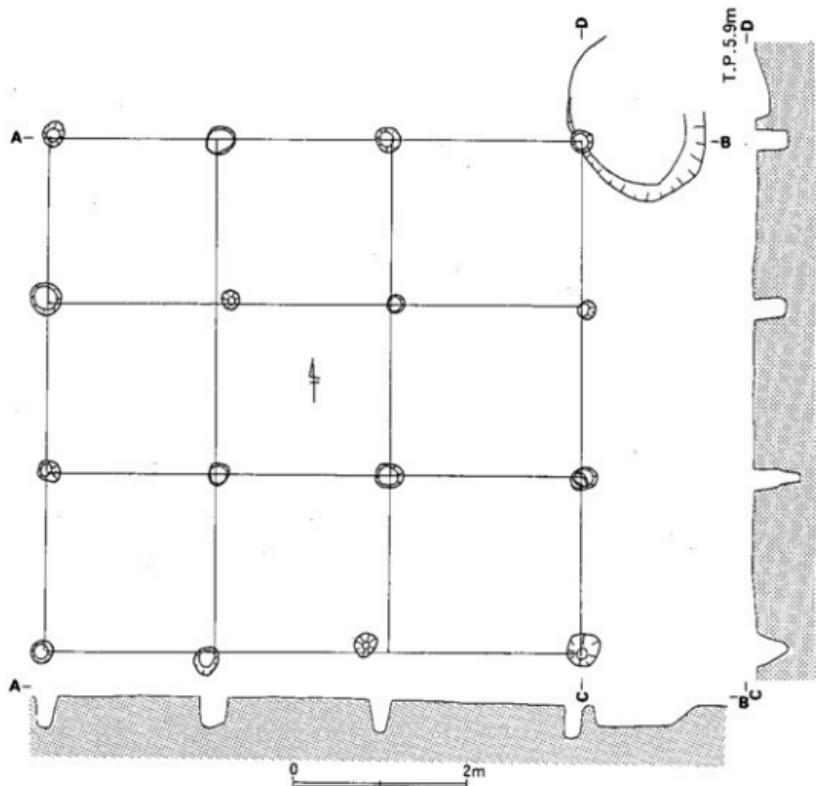
SK12は、約1m×約50cmの不整椭円形プランを呈するもので、深さ約15cm前後を測る。土師器などが出土している。

SK13は、約1.4m×約80cmの不整椭円形プランを呈するもので、深さ約15cmを測る。土師器などが出土している。

SK14は、径約1.65mの円形プランを呈するもので、深さ約25cmを測る。土師器・須恵器・瓦器などが出土している。

## 土器溜まり (SR01・SR02)

調査区の西端部に2個所の土器溜まりが検出され、土師器・須恵器などが多量に出土するとともに、SR02の一角から圭頭形鉄鎌が発見されている。



第4図 掘立柱建物SB01実測図



第5図 土壌SK06実測図

### 3. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物としては、古式土師器・土師器・須恵器・瓦器、青磁、管状土錘、鉄鎌・鉄刀等の鉄製品とともに石棒・磨製石斧等の石製品などがあげられる。

#### 古式土師器・土師器

砂礫層の直上から、古墳時代初頭の古式土師器の高坏などが若干数出土している。

土師器は、溝SD02・03、土壌SK05・06、土器溜まりSR01・02などを中心に出土し、器種としては、壺・甕・羽釜・鍋・甑・高坏・坏・皿・小皿などがあげられる。坏・小皿の底部は大部分が回転糸切り痕、皿はナデか未調整、坏にはヘラ削り・ヘラ切りのものも存在する。溝SD01～03、土壌SK05・08・14などから内外面丹塗りの坏・高台付坏・皿・高坏などが出土している。古墳時代終末期のものも存在するが、大部分が平安時代後期以降に比定される。

#### 須恵器

掘立柱建物SB01、溝SD02・07、土壌SK01～04・08・09・14、土器溜まりSR01・02などから出土し、器種としては壺・甕・蓋・坏蓋・坏・高台付坏などがあげられる。平安時代の所産のものが大部分で、一部に古墳時代終末期などに比定されるものも存在する。

#### 瓦器

掘立柱建物SB01、溝SD02・05、土壌SK07・08・09・14から塊の破片と思われるものが出でている程度である。平安時代末期以降の所産と思われる。

#### 青磁

掘立柱建物SB02の柱穴から中国産の皿が若干数出土し、平安時代末期に比定される。

#### 管状土錘

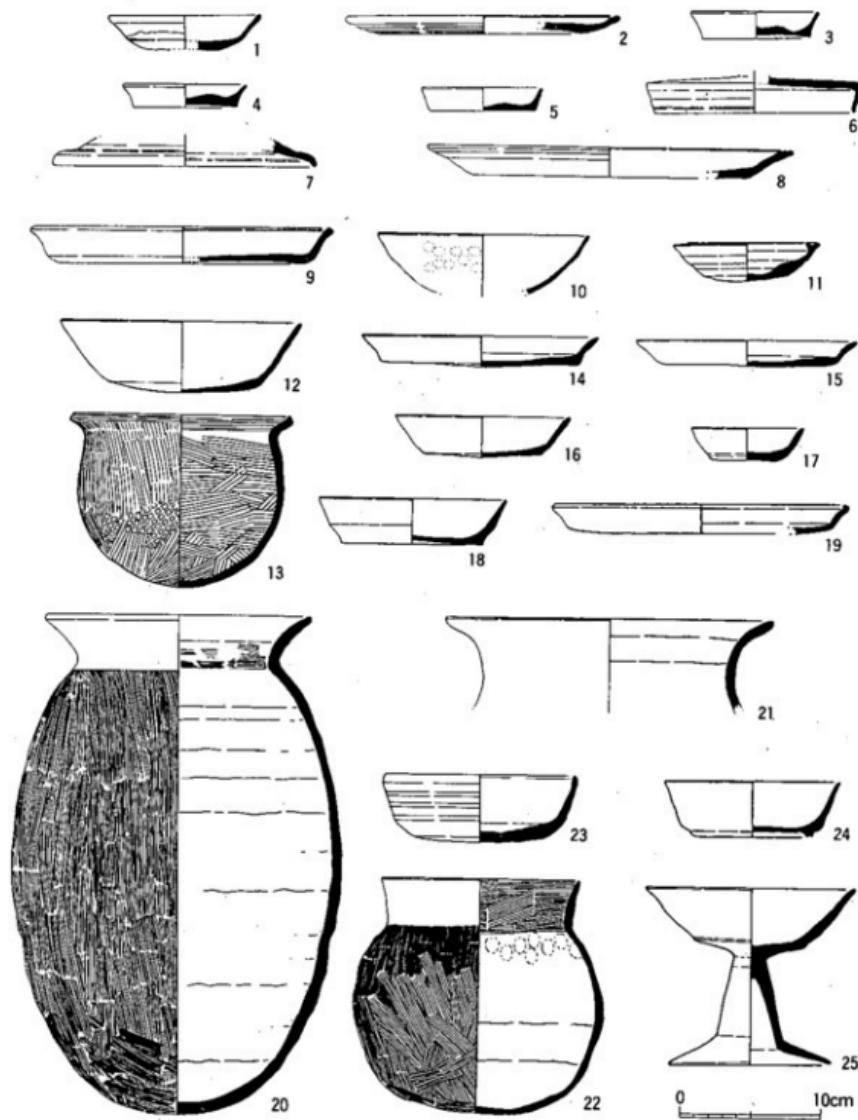
溝SD02・05、土壌SK02・05などから出土している。大型・中型・小型の3種類に大別され、さらに中央部が肥厚するものと、ほとんど直線的なものに細分される。いずれも、平安時代後期以降に比定されるものと思われる。

#### 鉄製品

土器溜まりSR02から圭頭形鉄鎌とC11グリッドから方頭形鉄鎌、E9グリッドから鉄刀片などが出土している。いずれも、古墳時代中期末以降に比定されるものと思われる。

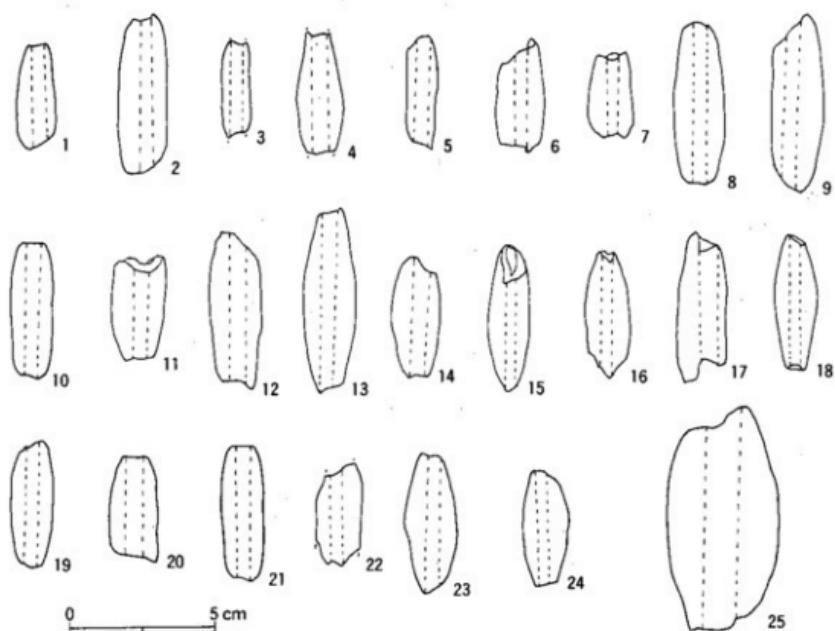
#### 石製品

石製品としては、B9グリッドから石棒とともに、調査区西端から磨製石斧片などが出土している。



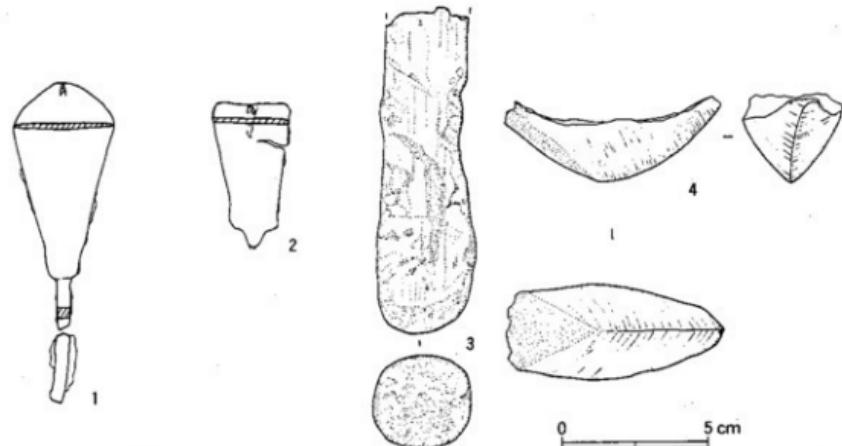
第6図 出土遺物実測図

- |                 |                        |               |             |           |
|-----------------|------------------------|---------------|-------------|-----------|
| 1 磁器            | 2~5,8~9,12~21・23~25 土器 | 6~7・11~22 須恵器 | 10 瓦器       |           |
| 1 挖立柱建物SB02     | 2 满SD01                | 3~6 满SD02     | 7~9 满SD03   | 10 满SD05  |
| 11 满SD07        | 12 土壇SK05              | 13~17 土壇SK06  | 18 土壇SK08   | 19 土壇SK12 |
| 20~22 土器窓まりSR01 | 23 G 5 グリッド            | 24 F 7 ピット    | 25 B 5 グリッド |           |



第7図 出土管状土錘実測図

1 潟SD02	2~4 潟SD05	5 土壌SK02	6 B 4	7 B 9
8 C 12	9 D 9	10 D 11	11 D 12	12 E 9
16 F 6	17・18 F 8	19・20 F 9	21・22 F 12	23 G 5
				24・25 G 9



第8図 出土鉄製品・石器実測図

1 主頭形鉄鎌	2 方頭形鉄鎌	3 石棒	4 磨製石斧
---------	---------	------	--------

#### 4. 小 結

今回の調査成果について簡単にまとめておきたい。

掘立柱建物等の生活遺構や出土遺物などの検出とともに、従来の該地域における調査成果なども踏まえて考えてみると、今回の調査でも奈良時代まで遡ると思われる遺物も確認されており、八万地域における平安時代を中心とする「律令時代の集落」が展開していたことが首肯される。平安時代の検出遺構は、出土遺物が少なく年代比定が困難なものも存在するが、「9世紀後半～10世紀初頭」・「10世紀後半～11世紀初頭」・「11世紀後半～12世紀初頭」<sup>(1)</sup>・「12世紀後半以降」などの4時期に大きく分けられる。

また、従来の周辺部の調査成果により、弥生時代終末期～古墳時代の集落の存在が指摘されていた。今回の該時代の遺構・遺物の検出などにより、更にその存在を裏付ける資料が追加された。いずれも、遺構伴出の遺物は少ないが、古墳時代終末期で7世紀前半～後半に比定される藤原宮跡の飛鳥II～IV期併行期のものが中心である。<sup>(2)</sup>

「掘立柱建物」については、SB01は総柱建物で集落の中心的建物と考えられ、出土の土師器皿・壺、瓦器塊などから、11世紀後半以降に比定される。<sup>(3)</sup> SB02は倉庫的な要素が強いものであり、出土遺物は少ない。柱穴から出土の同安窯系と考えられる青磁皿は口縁部が若干肥厚し、底部と外面体部下位には施釉されていない無文のもので、12世紀後半以降に比定され、<sup>(4)</sup>今回検出された遺構では、一番新しい時期に属すると考えられる。

「柱列」については、いずれも建物に付属する屏的要素が強く、出土遺構は少ないが、SH01は11世紀後半以降に比定されると思われる。

「溝」については、SD01は部分的な検出ではあるが、建物との関連が考えられ、土師器皿・丹塗り土師器などから、10世紀後半以降に比定される。SD02は掘立柱建物と関連し、敷地として画したものと思われる。須恵器で天井部が平らに近く、擬宝珠形のつまみを有すると思われる短頸壺の蓋や器壁の比較的厚い底部から垂直気味か若干傾斜して立ち上がり、口縁部はほとんど外反しない回転糸切り底の小皿などから10世紀後半以降に比定される。SD07は、搅乱が顕著のため性格は不明であるが、出土の須恵器蓋坏身が藤原宮跡の飛鳥第II期併行期の所産と考えられるので、7世紀前半に比定される。<sup>(5)</sup>

「土壤」としては、SK01・02は方形プランを呈し、他の土壤とは性格を異にしているものと思われ、年代的には出土の瓦器片や須恵器蓋片などから12世紀後半以降に比定される。SK05は丹塗りの土師器皿や底部ヘラ切りの土師器塊などから9世紀後半以降、SK06は土師器壺・皿などから10世紀後半以降に比定される。

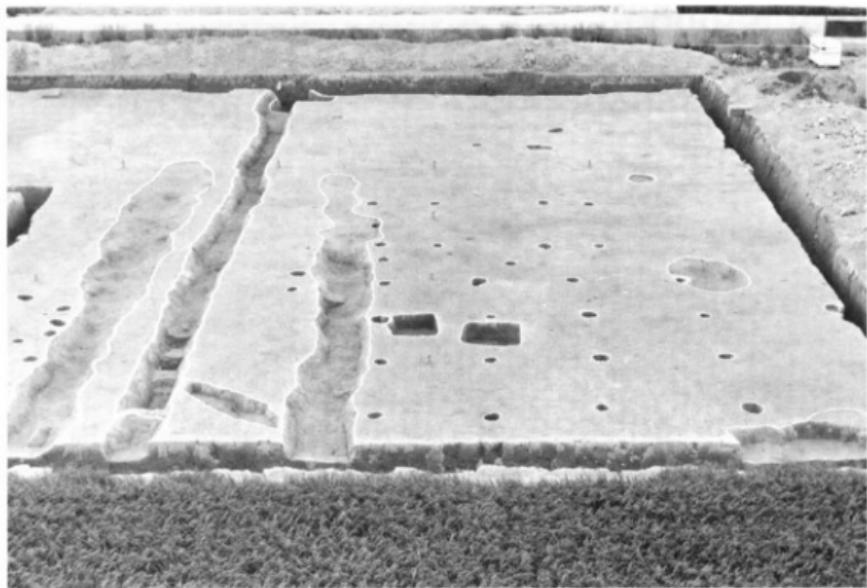
「土器つまり」のSR01は、出土の土師器壺・甕・瓶・杯、須恵器甕などから7世紀代を中心とした年代が比定される。<sup>(6)</sup> SR02の一角から出土した圭頭形鉄鎌は形態的に見て、古墳時代中期末～後期の所産で5世紀末～6世紀前半の年代が比定される。<sup>(7)</sup>

平安時代の遺構・遺物については、阿波国府跡の第6次調査（国府町観音寺字神明）をはじめとする重要遺跡確認調査で9世紀後半以降の土師器などが多量に出土しており、<sup>(8)</sup> 平安時代の樋口遺跡の性格究明のためには、これらの比較検討が必要不可欠と思われる。

古墳時代の遺構・遺物については、調査地点の南西に位置し、横穴式石室を内部主体とする「樋口古墳群」で6世紀末に比定される円墳の樋口1号墳（両袖式）・2号墳（片袖式）などとの関連が考えられる。「集落と墓地」との関連を知る上で、今後の周辺部での調査成果が期待される。

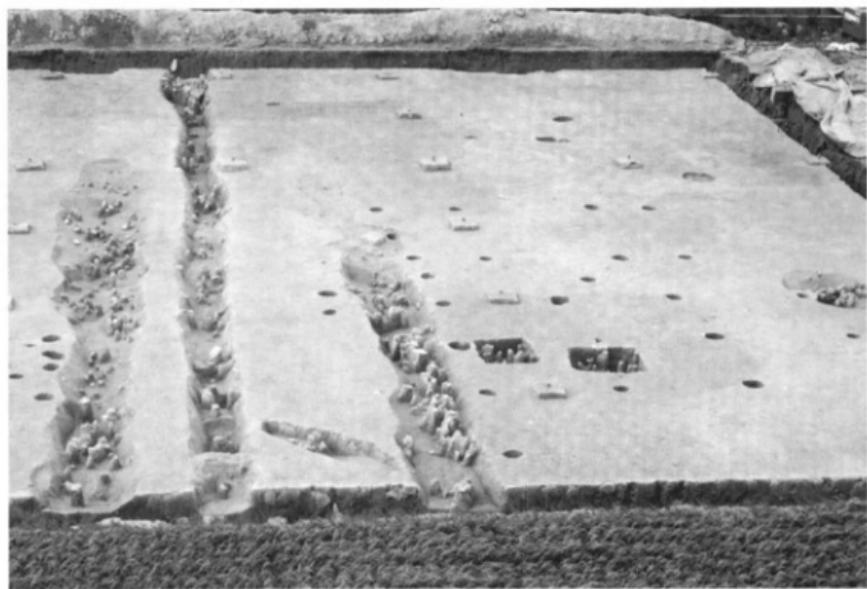
### 註

- (1) 山本信夫氏「統計上の土器－歴史時代土師器の編年研究によせて－」『乙益重隆先生古稀記念 九州上代文化論集』 1990.11ほか
- (2) 奈良国立文化財研究所編「飛鳥・藤原宮発掘調査報告II 藤原宮西方官衙地域の調査」『奈良国立文化財研究所学報』第31冊 1978.2
- (3) 大和古中近研究会編「大和の中世土器－瓦器焼・土師皿を中心として－」『大和古中近研究会資料』I 1991.2ほか
- (4) 森田 勉・横田賢次郎氏「太宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館研究論集』4 1978.3ほか
- (5) 藤原 学氏「古墳時代須恵器の終焉－蓋杯からみた古墳時代須恵器終末の様相－」『関西大学考古学研究室開設参拾周年記念 考古学論叢』 1983.3
- (6) 西 弘海氏「7世紀の土器の時期区分と型式変化」『土器様式の成立とその背景』所収 1986.5ほか
- (7) 古野徳久氏「古墳時代鉄鎌の編年－北部九州を中心として－」『九州考古学』第64号 1989.12ほか
- (8) 徳島市教育委員会編「阿波国府跡第6次調査概報－1987年度－」『徳島市埋蔵文化財調査報告書』第17集 1988.3ほか



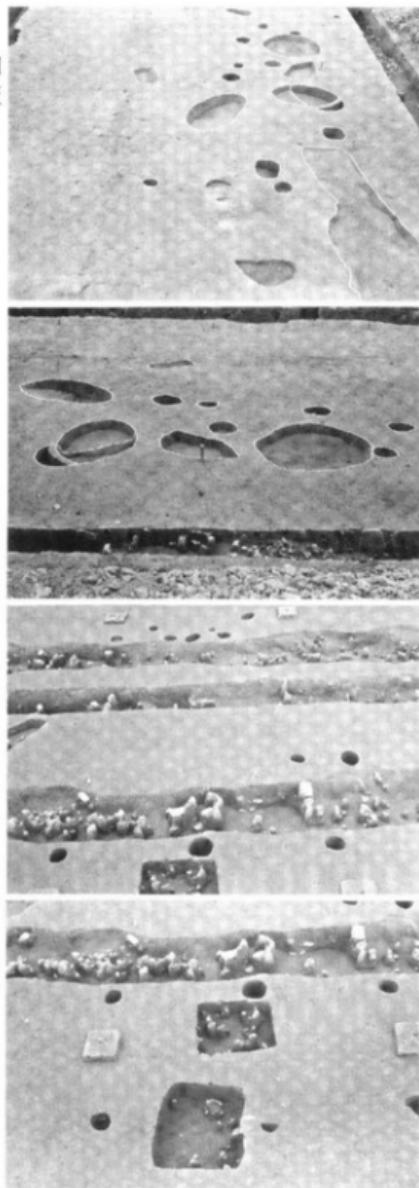
調査区東半部検出遺構

南より



調査区東半部検出遺構遺物出土状況

南より



左1段目 調査区西半部検出遺構

左2段目 調査区西半部検出遺構

左3段目 溝SD03・02・05

左4段目 溝SD03, 土壙SK01・02

西より

南より

東より

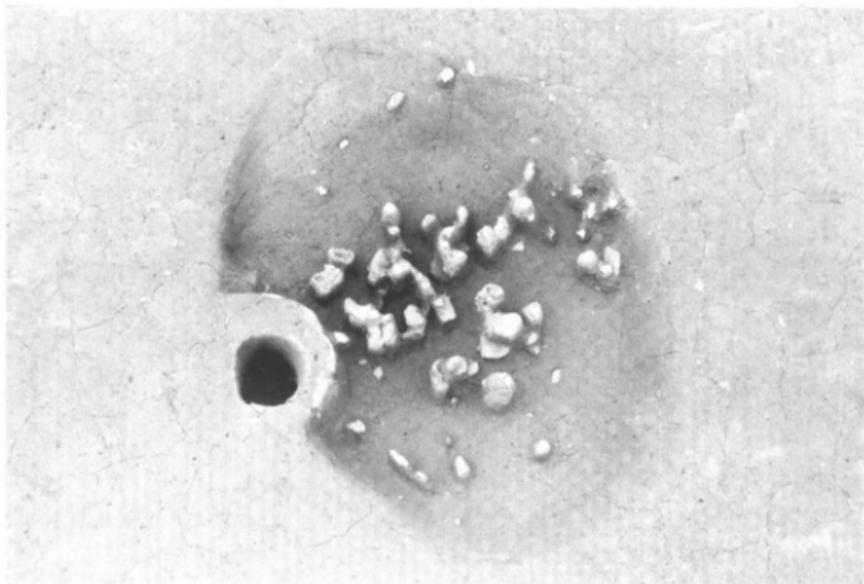
東より

右上 溝SD01

右中 溝SD02北端部遺物出土状況

右下 溝SD07須恵器出土状況

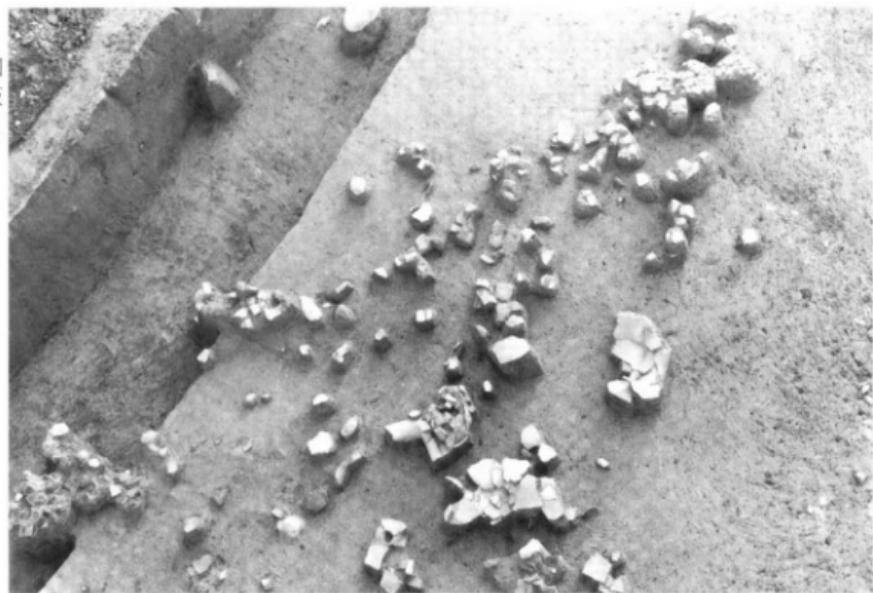
東より



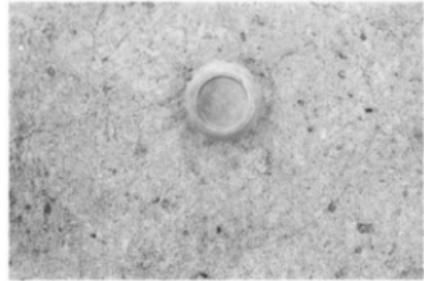
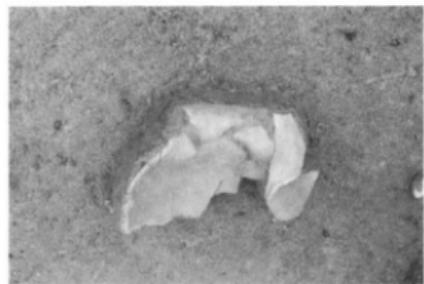
土壤SK05遗物出土状况



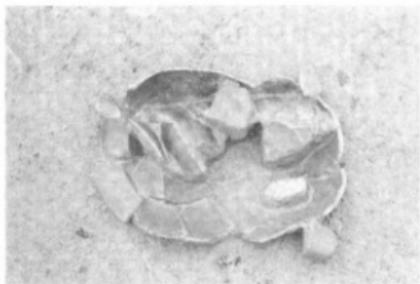
土壤SK06遗物出土状况



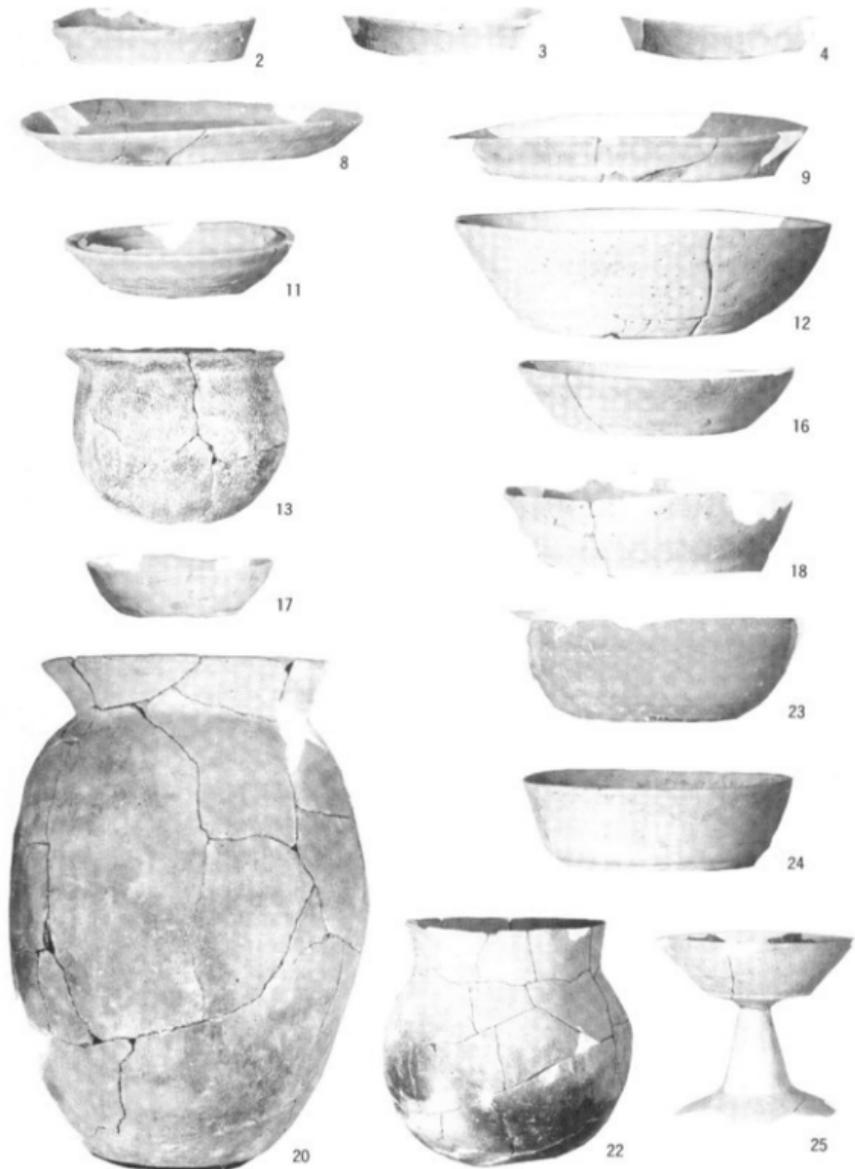
土器溜まりSR01遺物出土状況



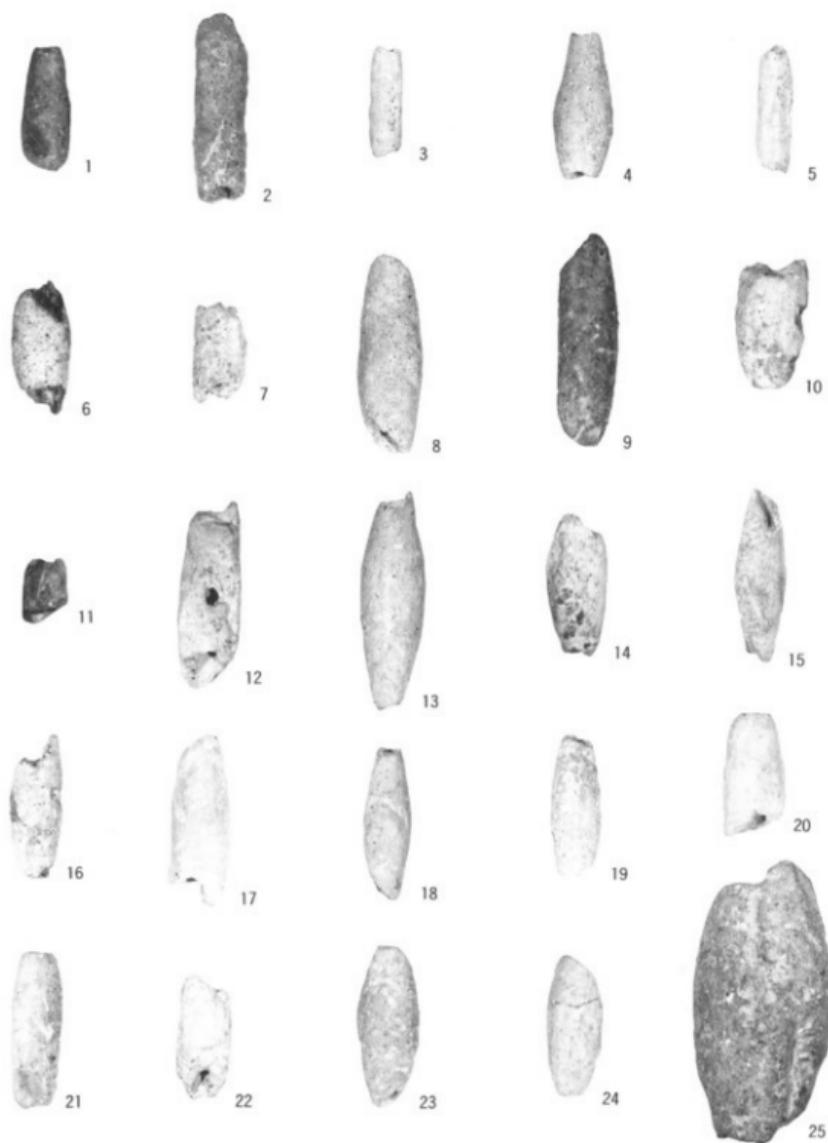
左上 土器溜まりSR01土師器出土状況  
左下 ピット土師器出土状況



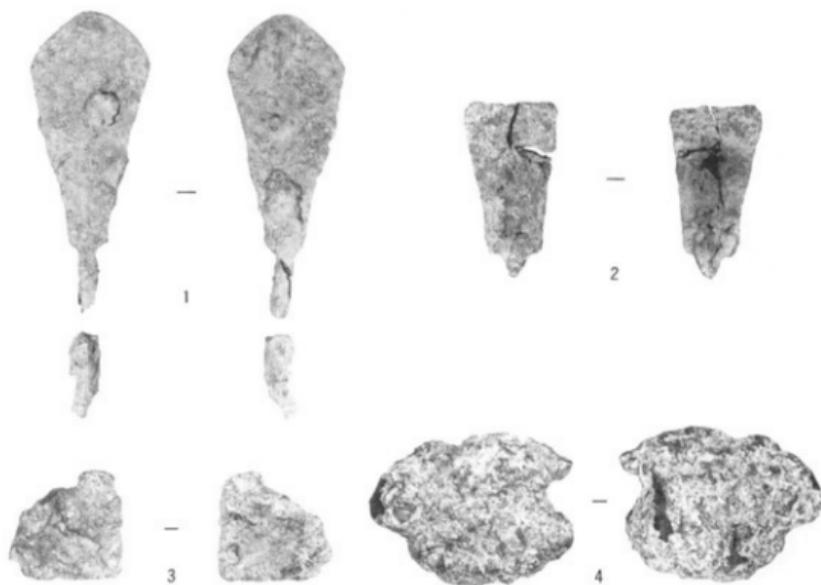
右上 土器溜まりSR01土師器出土状況  
右下 圭頭形鉄鎌出土状況



出土土器（縮尺不同）



出土管状土錘



出土 鉄 製 品

1 主頭形鉄鎌 S R02土器潤まり  
3 鐵刀片 E 9グリッド

2 方頭形鉄鎌 C 11グリッド  
4 鉄塊 G 11グリッド



出 土 石 棒



## IV. 名東遺跡発掘調査概要

——宅地造成工事に伴う発掘調査——

調査場所 徳島市名東町2丁目132番地

調査期間 平成3年4月26日～平成3年7月6日

調査面積 約270m<sup>2</sup>

### 1. 調査に至る経緯と経過

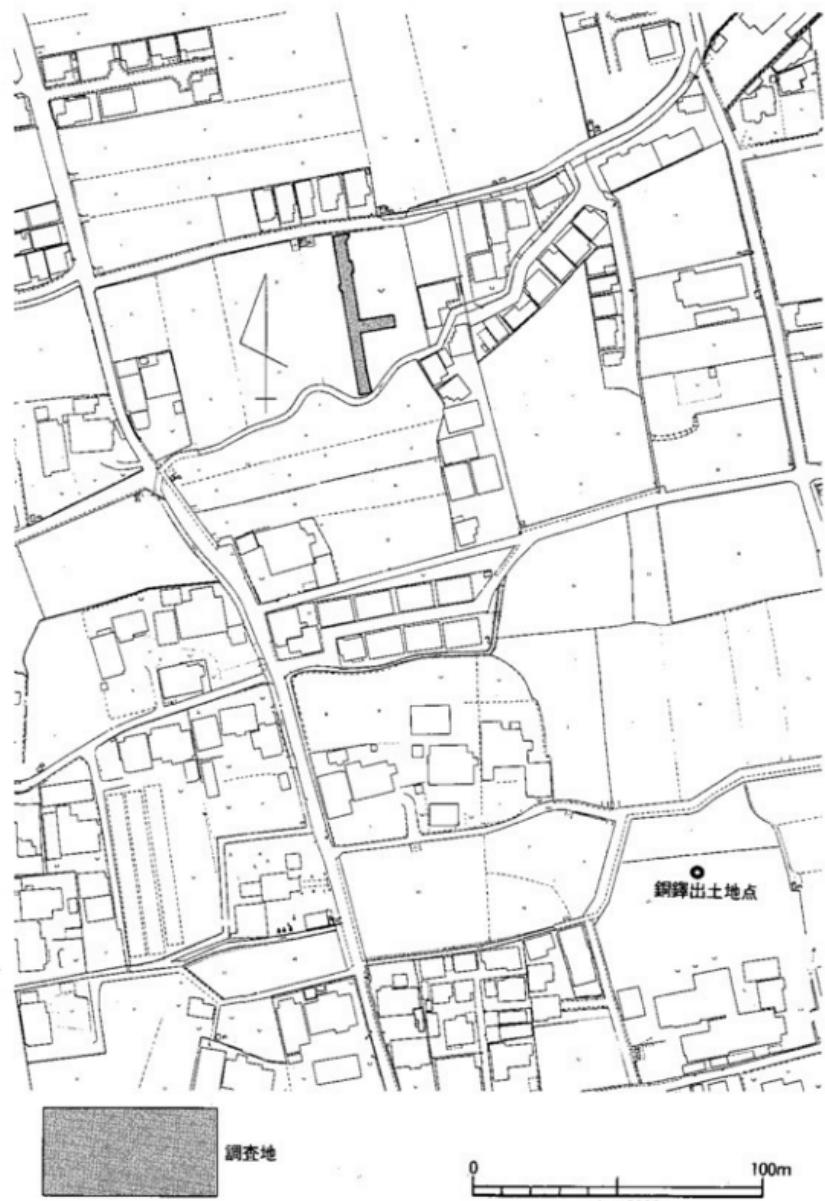
今回の調査は、(株)ゲンボクが宅地造成工事に先立ち、文化財保護法第57条第1項の規定に基づき埋蔵文化財発掘の届出を行ったことに起因する。

該当地は、縄文時代晚期から近世に至る周知の「名東遺跡」の一角にあたり、近年市内でもとみに宅地造成を中心とする諸開発が著しく、それらに伴う事前の発掘調査においては考古学・歴史学的に重要な成果を上げている。昭和62年の天理教国名大教会地区の調査時には銅鐸が出土し、全国的にも数少ない平野部での出土例として注目されたことは記憶に新しい。<sup>(1)</sup>また、方形周溝墓群の検出や中世農村集落の一端に迫る調査事例も増加している。

以上のような当該地のもつ文化財包蔵地としての地域性をふまえ、届出側と徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会（委員長＝岩崎正夫）両者の協議の結果、まず確認調査の実施を決定。4月上旬、開発申請地1,818m<sup>2</sup>内における3箇所の試掘調査地点のいずれにおいても遺物包含層の存在が確認されたため、調査委員会は文化財保護法第57条第1項の規定により本調査を実施するに至った。調査は、工法の説明を受けたうえで道路敷設部分のみを対象とした。包含層直上までを重機の掘削に依り、その後人力による包含層の掘削と遺構の検出に努め、2か月余りを費やして竪穴式住居跡、木棺墓、土器溜まり、旧河道などを検出して調査の全日程を終了した。

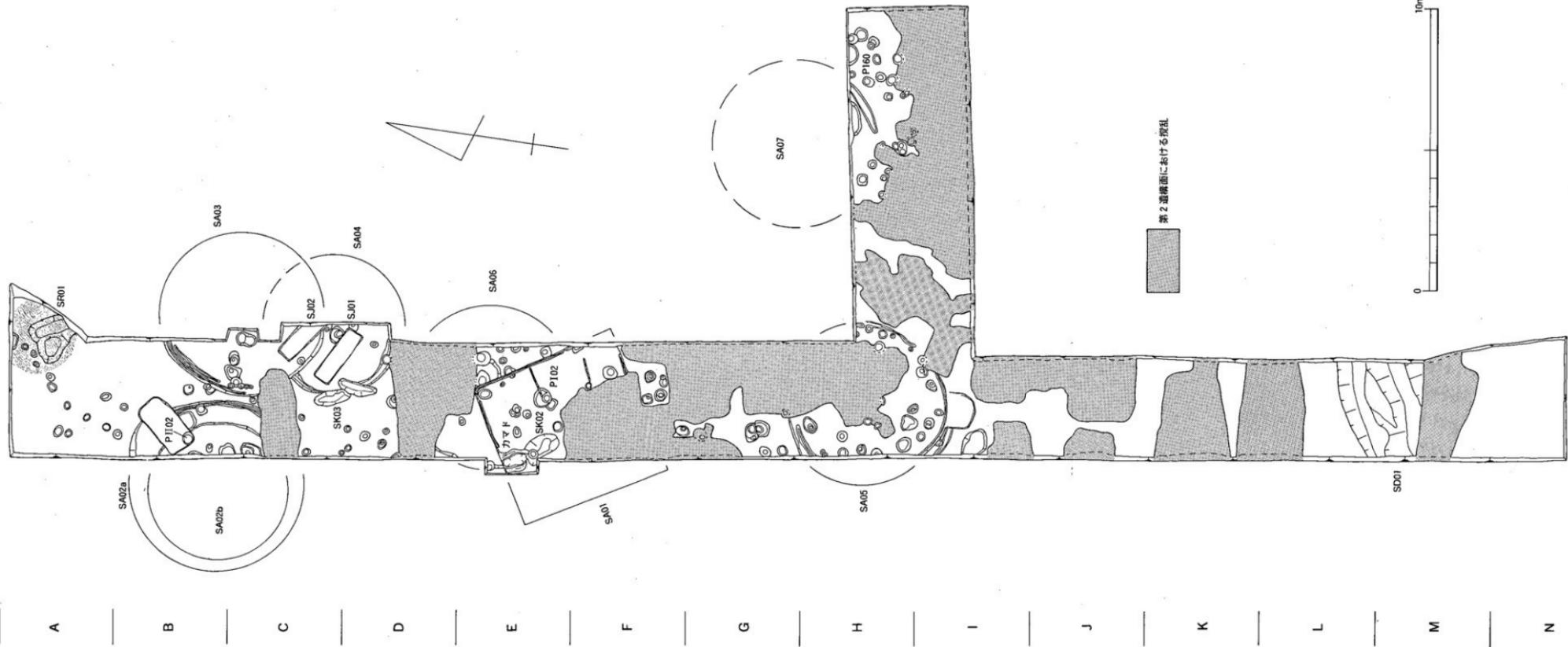
### 2. 調査成果の概要

調査地の現地表面の標高はT.P.+約8.1mを測る。ちなみにここより南東約250mに位置する天理教国名大教会地区周辺部との比高は-約0.3mである（第1図）。調査地は、もとはビニールハウスによる農作物栽培が行われており、ハウス撤去作業の際の擾乱が試掘調査時には予想できなかつたほど広範囲にわたって遺構面下にまで達していた（第2図）。



第1図 調査地位置図

第2図 通構配図



## 1) 層序

擾乱を免れた箇所での層序は以下概略のとおりである。

第1層：盛土および現代耕作土。層厚15~20cm。

第2・3層：旧水田耕作土I・II。層厚25~30cm。若干の近世陶磁器片と弥生土器片を包含する。

第4層：暗橙褐色シルト層で層厚5~10cm。1A区の一部においてのみ存在する。

弥生土器片を包含する。

第5層：暗茶褐色シルト層で層厚20~25cm。上部が旧水田耕作土IIによって削平を受けている。第1遺構面をなす。遺物包含層。

第6層：黄褐色シルト層。第2遺構面をなし、上面でT.P.+約7.5mを測る。

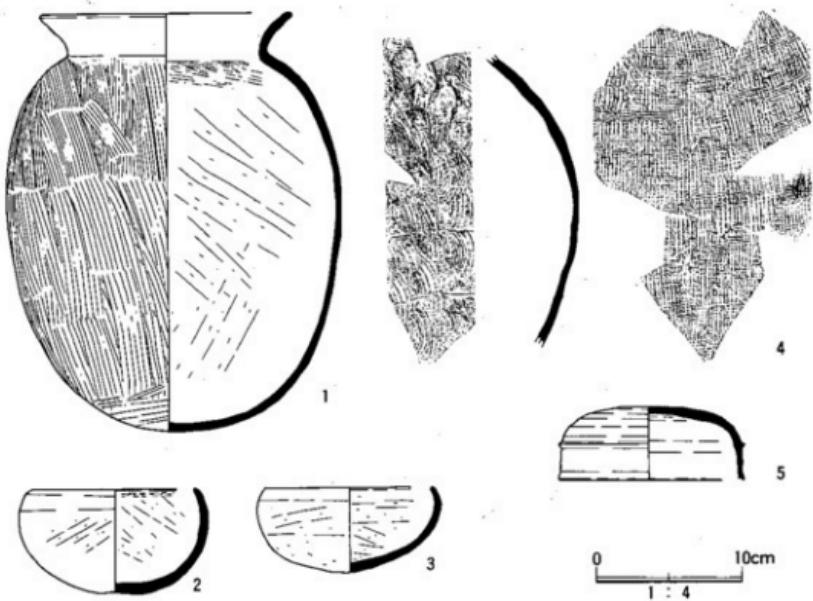
以上、基本的には第1~3層、第5、6層による比較的単純な層序をなしている。

## 2) おもな検出遺構・出土遺物

本調査区内においては、著しい擾乱を受けながらも第1遺構面として古墳時代の竪穴式住居跡1、弥生時代の木棺墓2、第2遺構面として弥生時代中期後半の土器溜まり1、竪穴式住居跡7（うち可能性を有するもの1）、土壤、ピット数基、平安時代の土師器、弥生土器片等を出土する自然河道跡を検出した。以下それらの概要を述べる。

### 竪穴住居跡SA01（図版1）

1E~F区で検出された一辺約5.5mの方形住居跡である。埋土は上層より①細砂混在黒褐色シルト②細砂混在暗褐色シルト③にぶい黄橙色土混在暗褐色シルトに大別される。住居跡プランを明瞭に確認できたのは第6層黄褐色シルト層直上に至ってからで、ここでの壁高は約20cmを測る。コーナー部の検出が唯一可能だった北隅には長径約40cm、深さ約40cmの柱穴が存在し、四隅に主柱を持つ住居であったことが想定される。住居跡内部周辺には幅6~10cmの壁溝をめぐらす。また中央部においても2本の小溝が検出された。間仕切り的なものが存在していたのであろうか。北西壁沿い中央部には長径約1m、短径約80cmの竈の痕跡が認められ、炭化物を含む焼土に半埋没した状態で土師器の甕(1)・鉢(2)が出土した（図版2）。甕(1)は、やや胴長で丸底を呈し、体部外面は上半部と下半部で目の異なる刷毛調整を施している。また住居内埋土①、②には埋没過程で混入した弥生土器片や扁平両刃石斧(31)・石鎌などが含まれていたが、埋土③下部即ち床面直上では須恵器の甕(4)・坏蓋(5)が出土している。胴部の破片のみが出土した須恵器甕(4)は、胴部復元最大径が約30cmを測る。外面には平行叩目文の交



第3図 竪穴住居跡SA01出土遺物

差によって生じた2mm四方の格子ふうの叩目が見られる。坏蓋(5)は陶邑編年のTK-23型式併行期に位置づけられ、5世紀末葉の年代が与えられる。

#### 柱穴P102

SA01内中央やや東寄りで検出された長径、深さともに約60cmを測る柱穴で、同住居の柱穴のひとつと考えられる。底部径は約20cmで、ここから石臼の欠損品が出土した。根石に転用したものであろう。

#### 竪穴住居跡SA02a, 02b (図版3:上)

1B～C区西半で検出された弥生時代中期後半の竪穴住居跡である。調査区内においては東半部が検出されたにすぎないが、推定径5.5～6mの不整円形を呈する住居跡(02a)で、現存壁高は約10cmを測る。内部には最大幅14cm、深さ5cm前後の壁溝が痕跡をとどめる。なお、住居跡完掘時点で、内周部が幅約70cmで5～10cmの高まりを呈したが、これはベッド状遺構ではなく、同住居跡の埋土堆積状況などから、住居拡張の可能性が考えられる。つまり「新宅」にするに際しての柱配置の変更に伴い、「旧宅」(02b)の柱穴を埋めるために床面に若干の盛土を施し、その結果「新宅」の床面が

「旧宅」の時よりも高くなつたため、床面まで完掘した時点でベッド状の段差として現れたと考えられよう。「旧宅」の推定復元径は5m前後である。

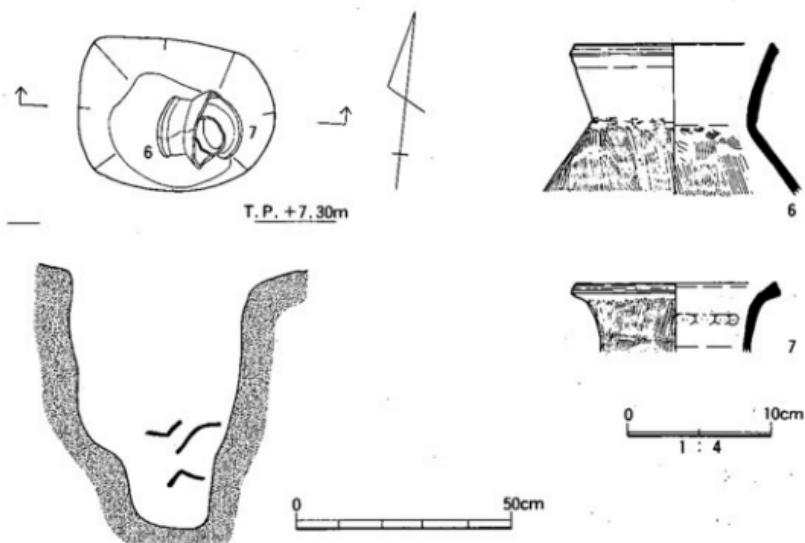
旧住居の南東壁際の床面においてサヌカイトの剝片14点がまとまって出土した（図版3：下）。うち2点は接合する。石器の素材作取過程で生じた「石屑」の廃棄を意図した行為が看取される。石鏃の完形品4点と甕(11)などが出土している。

#### 柱穴PII02（第4図、図版4：上）

住居跡SA02 b内において検出された長径45cm、短径35cm、深さ55cmの柱穴で、埋土はにぶい黄色土を含む暗褐色シルトの単層である。底部付近で2個体分の壺の口縁部のみ(6,7)が、一方を他方に挿入させるかのような状態で出土した。これは廃棄の可能性も否定できないが、前述の住居拡張に際して、埋棄する旧住居SA02 bの柱穴において執り行つた地鎮祭的な祭祀行為の痕跡と思われる。

#### 竪穴住居跡SA03（図版3：上）

1B～C区東半、SA02 aに東接するかたちで検出された推定径6m前後の円形住居跡である。現存壁高は20cm前後を測る。住居跡内北西部において二重にめぐる壁溝が確認された。調査区の一部拡張により中央部で炉跡が検出され、埋土中より壺(12)が出土した。また周辺部においては甕、土製紡錘車1点(33)、石鏃4点などが出土地している。



第4図 柱穴PII02および出土遺物

### 豊穴住居跡SA04

1 C～D区東半で、SA03によって切られた状態で検出された推定径5m前後の円形住居跡である。壁高は5cm前後をとどめるにすぎず、壁溝は検出できなかった。床面には第1遺構面からの木棺墓の掘形が及んでいる。甕、壺、高杯の破片と欠損品を含む2点の石鎚が出土している。

### 豊穴住居跡SA05（図版4：上）

1 G～I区で検出された直径約5.5mの円形住居跡である。この住居跡も壁をほとんど残していないが、壁溝が明瞭な痕跡をとどめていた。南側に幅1.2m、長さ1.0mの張り出し部を持ち、出入り口の可能性が指摘される。張り出し部の西側では幅約20cmの浅い溝が検出された。屋外に付設された周溝の残存であろうか。

壺(15～17)、甕、高杯(20)、土製紡錘車(32)やサヌカイトの剝片多数と、長さ4cm前後の優品のものを中心完形の石鎚8点と同未製品4点が出土している(24、27、28、図版5：上)。なお本住居においては砂岩製の石杵、石臼の破片計15点が出土しており、うち数点には朱の付着が確認されている(図版11～40～42)。

### 豊穴住居跡SA06

1 E区において確認された。豊穴住居跡SA01の掘形および現代の攪乱によって大部分が崩壊しており、一部で僅かに壁面の立ち上がりを確認したのと、住居中央部と思われる位置で炉の痕跡を検出したにすぎない。推定径は約6mである。

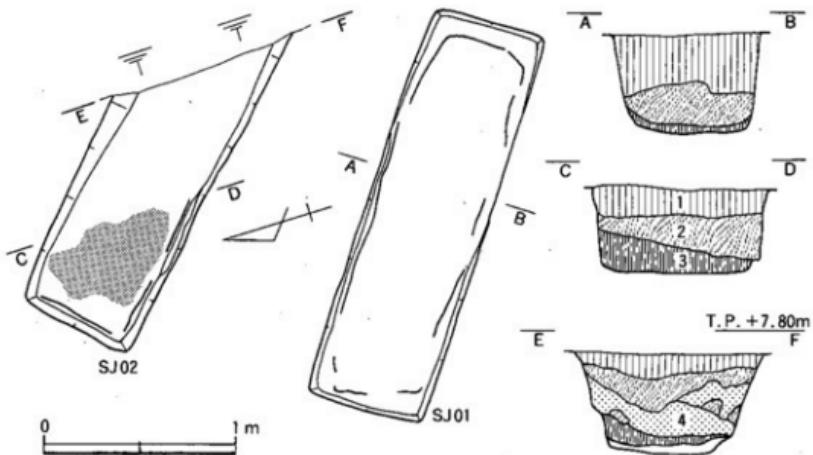
出土土器は甕、高杯の破片(21)など僅少であるが、床面において多量のサヌカイト片の散乱状態が認められた。特に炉の際においては、数mm大の剝片200余点が45cm×50cm範囲に集中分布をみせ、微調整剝離を要する石器（おそらく石鎚であろう）製作の最終行程が行われた事実を示唆している。石鎚は1点のみ出土した。

### 豊穴住居跡SA07

3～4H区、調査区北壁際で幅約30cm、深さ10cm前後の弯曲した溝を検出した。この溝は、根柢に乏しいが住居内外いずれかの周溝の遺存である可能性も考えられ、推定径6m前後の円形住居跡の存在を想定した。周溝外周部で石鎚2点が出土している。

### 木棺墓SJ01、02（第5図、図版7：上）

1 C、D区の第一遺構面において、2基が80cmの間隔で並列して検出された。主軸はいずれも北西～南東にとる。SJ01は長さ2.1m、幅65cm、深さ50cmを測る。SJ02は全容を検出できなかったが、SJ01と同等の法量が推定される。基本埋土はいずれも上層

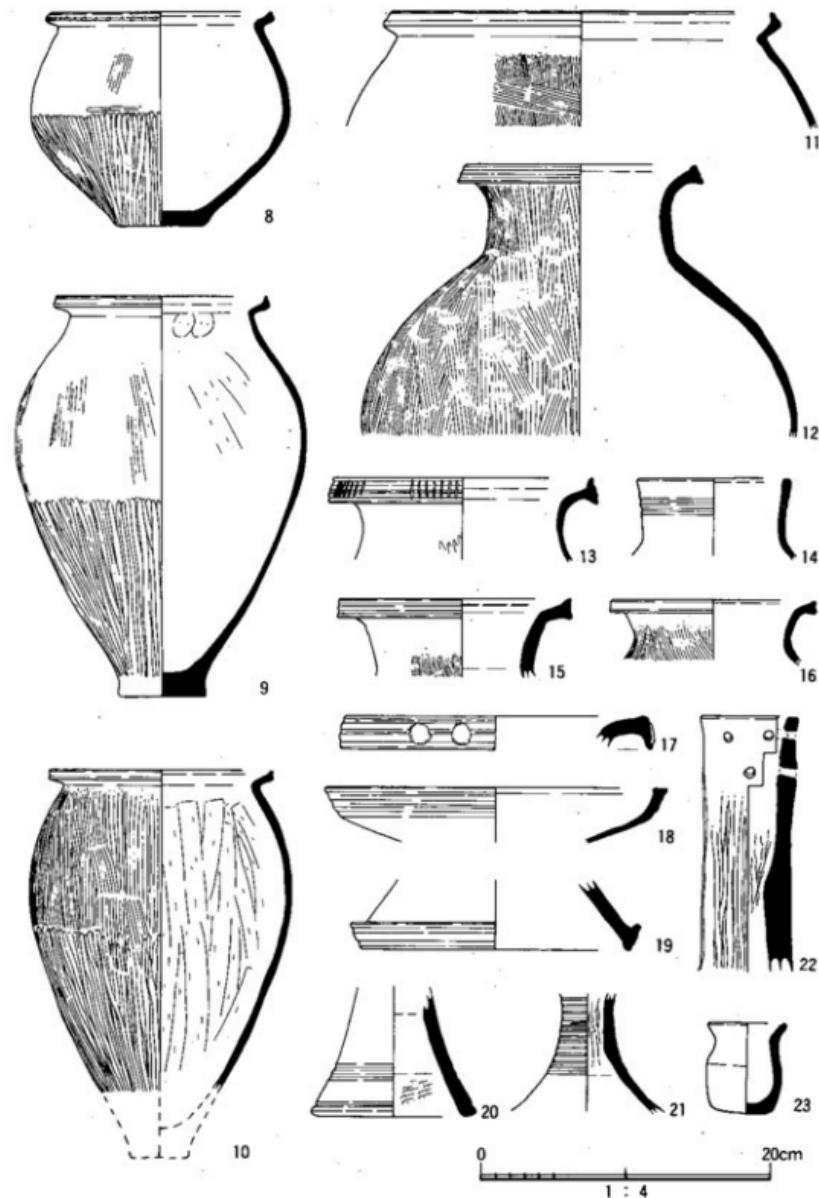


第5図 木棺墓SJ01, 02

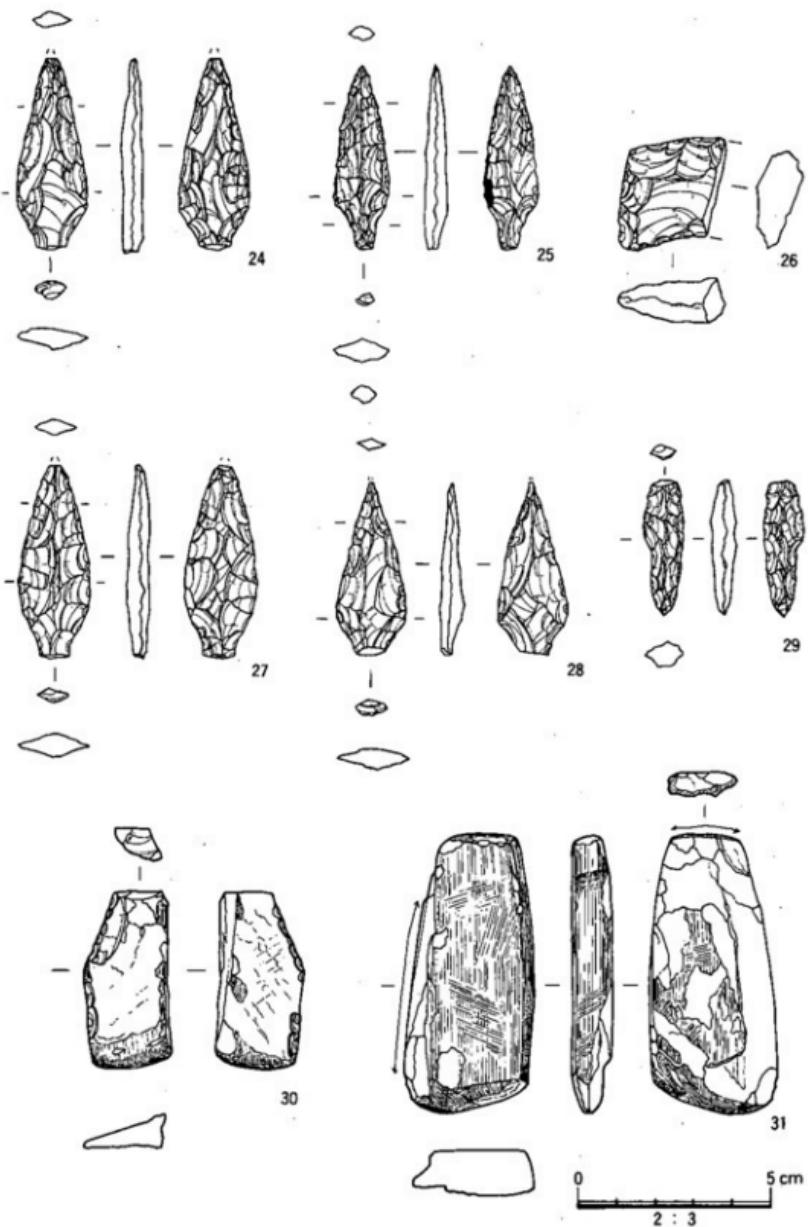
から①暗褐色土, ②にぶい黄色土混じり黒褐色土, ③黒色土であり, SJ01②層において石錐1(29), 剥片剥離の許容限度直前の板状石核1, SJ02②層中で石鎌1, 双方②～③層にかけて若干の土器片が出土している。棺材は遺存せず, 墓壙床面に溝状の掘込みも検出されなかつたが, 床面外周部分に黒色土の筋状の痕跡が認められたこと, またSJ02床面においては一部拵がりとしてとらえられたことから, 本来棺材が存在していたことが想定され木棺墓としてとらえた。墓壙床断面は全面的に微かに舟底状を呈する。棺形態については不明である。

#### 土器溜まりSR01 (図版7)

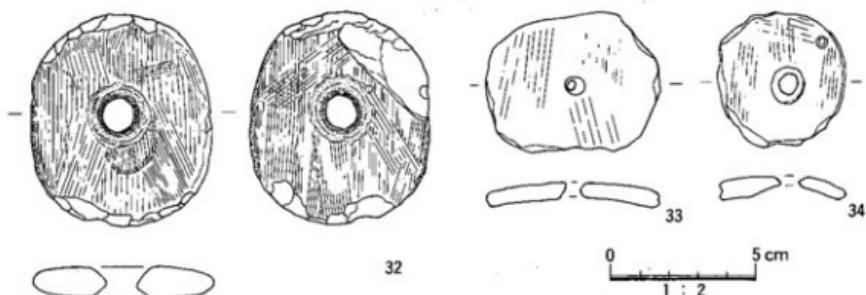
1 A区の北東隅で検出された。東西約5m×南北2.5m以上の拵がりをもつ。下に, 一部溝状を呈し最深約70cmを測る推定4×3mの土壙の存在が確認された。土器の廃棄は, 土壙底部から上部にいたるまで連綿と続くが, 埋土最上層が堆積し土壙が埋没をし終える段階に最も集中的な廃棄をみせている。遺物は壺(17, 22), 壺, 高杯(18, 19), 器台, 回転台形土器, ミニチュア壺(23), 土製紡錘車, 石鎌(25), 石鎌(あるいは石刀)(26)などが出土している。壺頭部(35)は, 断面三角形の突带上に棒状浮文を施したもので, 播磨・西摂地方の特色が看取される。また, 壺頭部の指頭圧痕突蒂文, 口縁部の「凹線文+円形浮文」(17)や「櫛描波状紋+直線紋」(36～38)など, 加飾されたものがやや目立つ。



第6図 出土遺物(1)



第7図 出土遺物(2)



第8図 出土遺物(3)

#### 土壤SK02（図版5：下）

SA01内で検出された $1.4m \times 0.8m$ 、深さ20cmの弥生中期の土壤である。炭化物が頭著にみられる。甕(10)、高環、サヌカイト剝片などが出土している。

#### 土壤SK03

木棺墓SJ01の西側で検出された長径1.3m、短径50cm、深さ15cmの楕円形を呈する土壤である。甕(9)が出土している。木棺墓との相関関係は不明である。

#### ピットP160

$45cm \times 30cm$ 、深さ約40cmを測る。石製紡錘車(32)が出土している。

#### 自然河道跡SD01（図版7：下）

調査区南端部1M～N区で北岸部の落ち込みを検出した。北東方向に流路をとり、現代の用水路にはほぼ並走するものと思われる。埋土層観察において、三度にわたる細砂層とシルト層（灰粘土層）の交互堆積状態が認められた。上～中部「シー砂ーシ」層においては遺物を殆ど含まない。中～下部「砂一灰粘一砂」層では、上層細砂層中において、若干の土師器片に混じって弥生土器片、小型扁平両刃石斧(30)が出土し、下層の灰粘土層からは須恵器破片と土師器坏・皿(43～47)が一括で出土するという層位的な遺物の新旧逆転現象が看取された。幾度となく起きた旧船喰川水系の氾濫が、弥生集落跡を包蔵する名東の地を洗い流した証左として捉えられよう。なお、現代の擾乱と湧水の影響による壁面の崩壊で調査が困難を極めたため、以下の掘り下げを断念した。最下細砂層（弥生土器片包含）上面までの深さは約1.5mを測る。

### 3. 小 結

今回の調査においては、少面積のうえに搅乱が追い打ちをかけた状況下にもかかわらず、竪穴住居跡8棟をはじめとする遺構の密な検出がなされた。ことに弥生時代中期後半期の住居跡群は、当該期の一集落の中枢部として把握することが可能であろう。

調査区南端で検出された旧自然河道が、集落の外濠的役割を担っていたか否かは確証がないが、いずれにしろ本集落居住域を、南方眉山の麓に展開する方形周溝墓群造営域と隔するものとして理解されよう。この方形周溝墓群が検出された「天理教国名大教会地区」においては住居跡の検出を見ていないが、今回の調査終了後、本調査区北側の道路を挟んだ地点で実施した調査において方形周溝墓1基が確認されており<sup>(2)</sup>、これを本集落のエリアに包括される墓域の一角と理解するならば、自然河道SD01を介在し南北に単位を異にする集落あるいは墓域が存在していたことが想定される。

住居跡群中、南端に位置するSA05から自然河道SD01までの約13mの間では、遺構が検出されなかつた。広場的な、あるいは河道までの距離として必要最少限の空間利用域であろうか。

竪穴住居跡SA05において確認された張り出し部については、出入り口の可能性を指摘したが、機能面において明確な判断を成しうる良好な証拠は得られなかつた。張り出し部を持つ住居跡は、時期的・形態的に差異は認められるが、県内では板野郡の黒谷川郡頭遺跡<sup>(3)</sup>や市内国府町の矢野遺跡<sup>(4)</sup>で検出されている。住居（あるいは工房の施設）は、人間が起居し生業を営む場である以上、いかなる形態であろうとも出入り口を有するのが必然であろう。しかし検出事例をみる限りではその痕跡をとどめていないものが遙かに凌駕している。これを単なる検出例の数的偶然でないと考えるなら、張り出し部等の痕跡をとどめるものを形態的特異例として把握し、そこに機能的特異性を摘出することが必要であろう。むろん時期的・地域的（集落的）な較差が潜在していることも考慮しなければなるまい。今後も増加するであろう類似形態の住居跡検出例に対し、より多角的方向からの検討が望まれる。

なおSA05においては、朱の付着する石杵・石臼の破片が出土した。水銀朱の生産・精製あるいは流通に関与した遺跡としては、阿南市若杉山遺跡、徳島市樋口遺跡、鮎喰遺跡、黒谷川郡頭遺跡などが挙げられるが、供伴土器により、朱の生産については弥生時代後期後半に上限が置かれている<sup>(5)(7)</sup>。今後、この上限を確実に廻らせるに十分な証拠が提示されることと思うが、今回の出土事例はそれを示唆するものであると考える。<sup>(8)</sup>

古墳時代中期の方形堅穴式住居跡は1棟のみ検出された。同時期の住居跡は、近接遺跡では庄遺跡（南庄町4丁目地区）<sup>(5)</sup>、南庄遺跡<sup>(6)</sup>で検出されている。今後検出例の増加に伴い、当該期の集落の様相が浮かび上がって来るであろう。

木棺墓SJ01、02については、その整然さに同時期埋葬の可能性が感じられる。掘形を含め類似様態は鮎喰南遺跡で確認されており、棺材の痕跡は認められなかったがこれについても木棺墓の可能性が指摘される。

最後に調査成果のひとつとして加筆したいことは、サヌカイト剝片と石鎌の多量の出土である。集落の特性として把握することは不可能であるが、住居（集落）が廃棄される間際の生活の痕跡として、他集落の様相との比較を行いうえで良好な事例と成り得たと言えよう。また、剝片の接合が一部見られたが、弥生時代の石器製作技術の発明という観点にたてば、より良好な一括資料としての接合資料が今後増加することに期待が持たれる。

## 註

- (1) 名東遺跡発掘調査委員『名東遺跡発掘調査概要－名東町2丁目・宗教法人天理教国名大教会神殿建設工事に伴う発掘調査－』1990年。
- (2) 現在調査後の整理作業を継続中であり、未報告である。
- (3) 徳島県教育委員会『黒谷川郡頭遺跡V－昭和63年度発掘調査概要－』1990年。
- (4) 徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会『矢野遺跡発掘調査概要－四国電力応神東線鉄塔建設工事に伴う発掘調査－』1991年。
- (5) 徳島市教育委員会『第8回埋蔵文化財資料展 阿波を掘る』1987年。
- (6) 徳島市教育委員会『第10回埋蔵文化財資料展 阿波を掘る』1989年。
- (7) 徳島県教育委員会・徳島県博物館『若杉山遺跡発掘調査概報－昭和61年度－』1987年。
- (8) 住居跡SA05からの供伴土器により、朱の生産が少なくとも弥生時代中期末葉まで遡る可能性が強い。
- (9) 徳島市教育委員会『第9回埋蔵文化財資料展 阿波を掘る』1988年。
- (10) 徳島市教育委員会『第7回埋蔵文化財資料展 阿波を掘る』1986年。ここでは土墳墓として捉えた。



竪穴住居跡SA01遺物出土状況

北西より



竪穴住居跡SA01

南東より



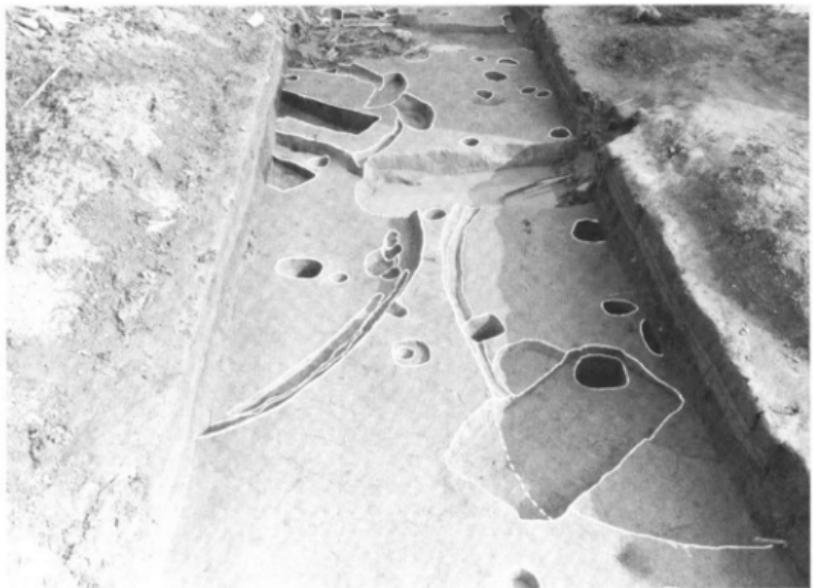
SA01内甕出土状況

東より



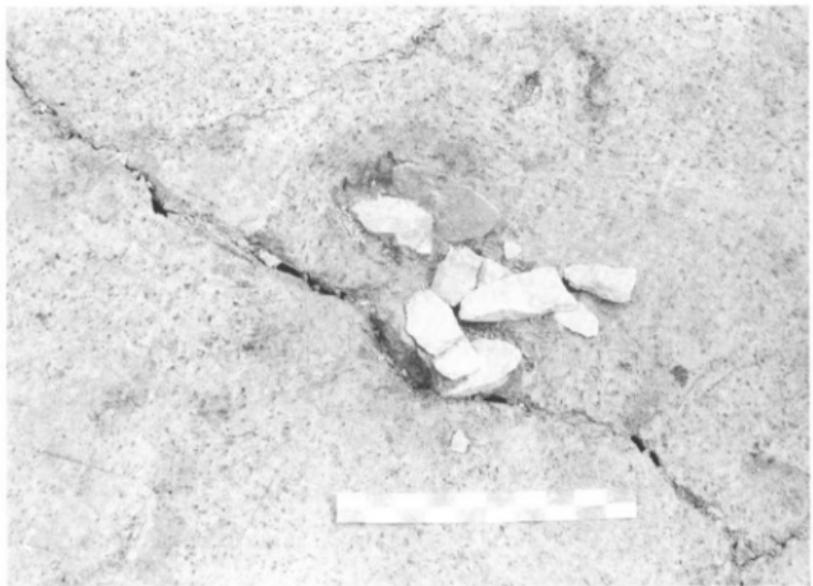
SA01内鉢出土状況

西より



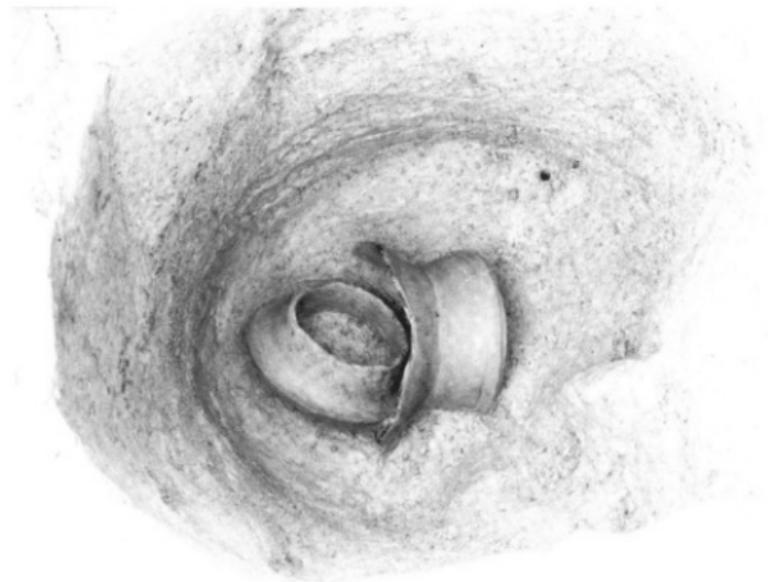
堅穴住居跡SA02a, 02b, 03, 04

北より



SA02b内サヌカイト剝片出土状況

北より



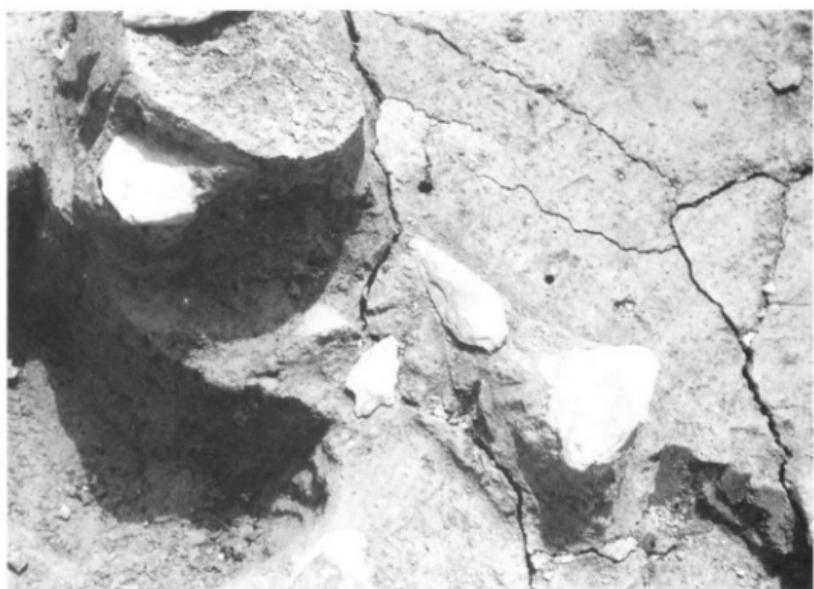
柱穴P II 02内壺口縁部出土状況

北より



竪穴住居跡SA05

南より



SA05内石鎌出土状況

東より



土壤SK02遺物出土状況

南より



土器溜まりSR01検出状況

南より



同下層部遺物出土状況

東より



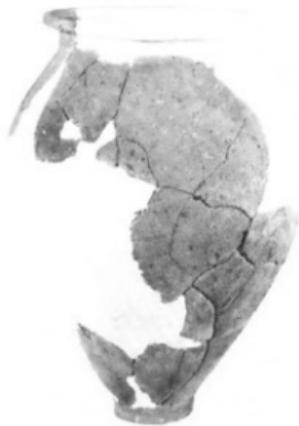
木棺墓 SJ01, 02

北西より



自然河道 SD01

西より



9



10



8



12



6

出 土 遺 物



13

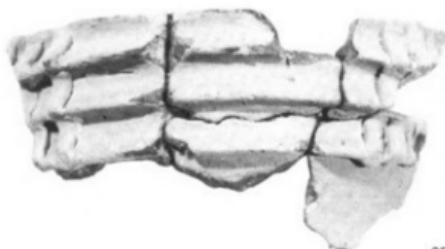


23



273

17



35



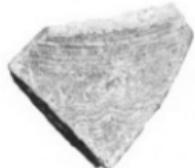
22



36

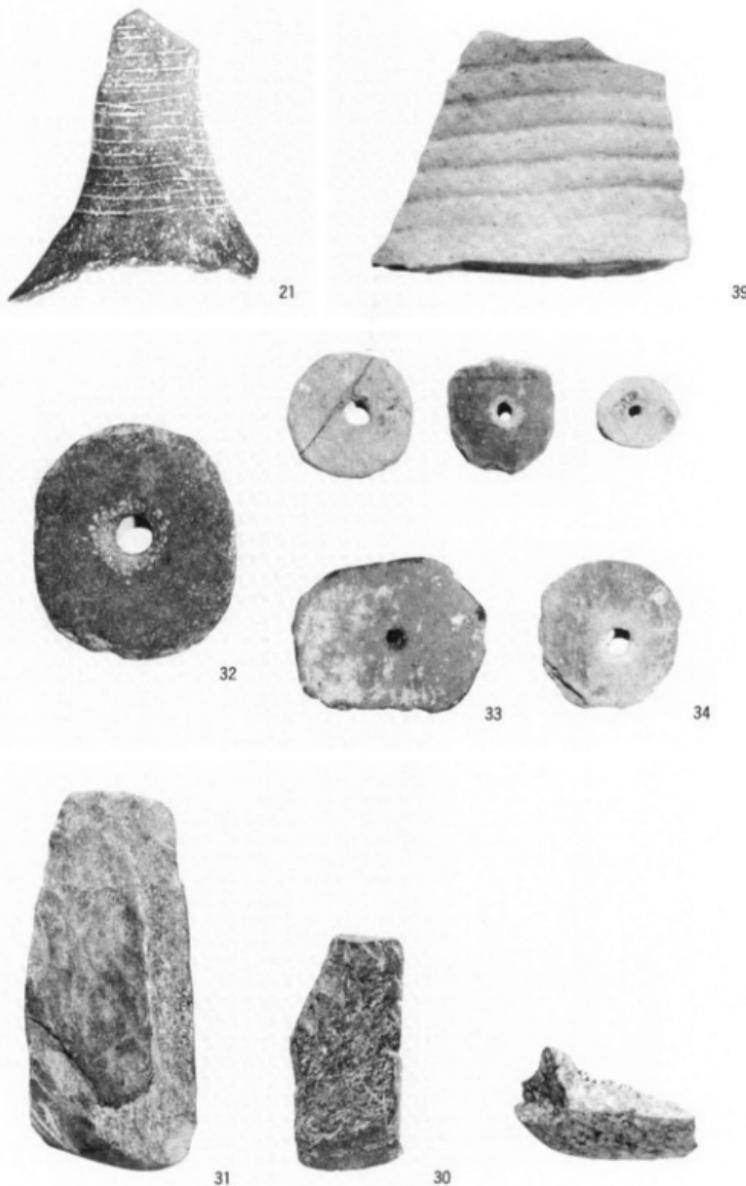


37

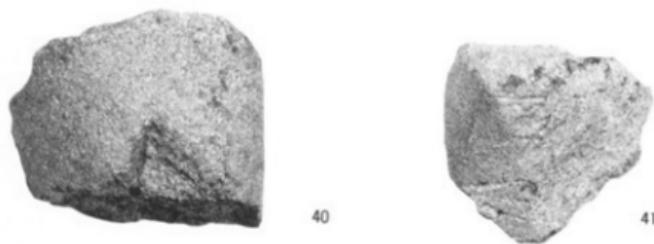
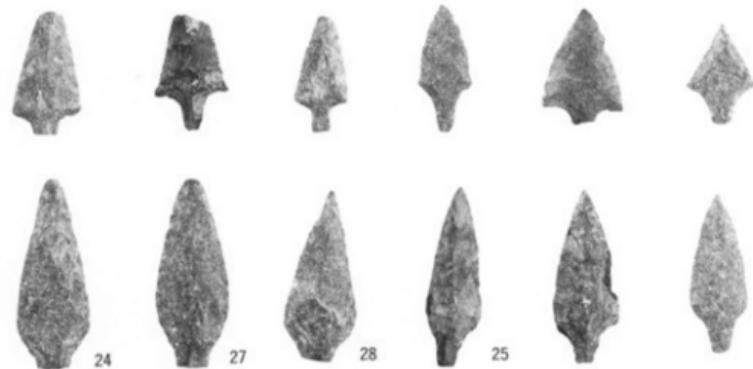


38

出 土 遺 物



出土遺物



出土遺物



1



2



3



4



5



43



45



44



46



47

出 土 遺 物